

九月廿六

白王上移蹕廣島行宮送督海表軍政恭紀



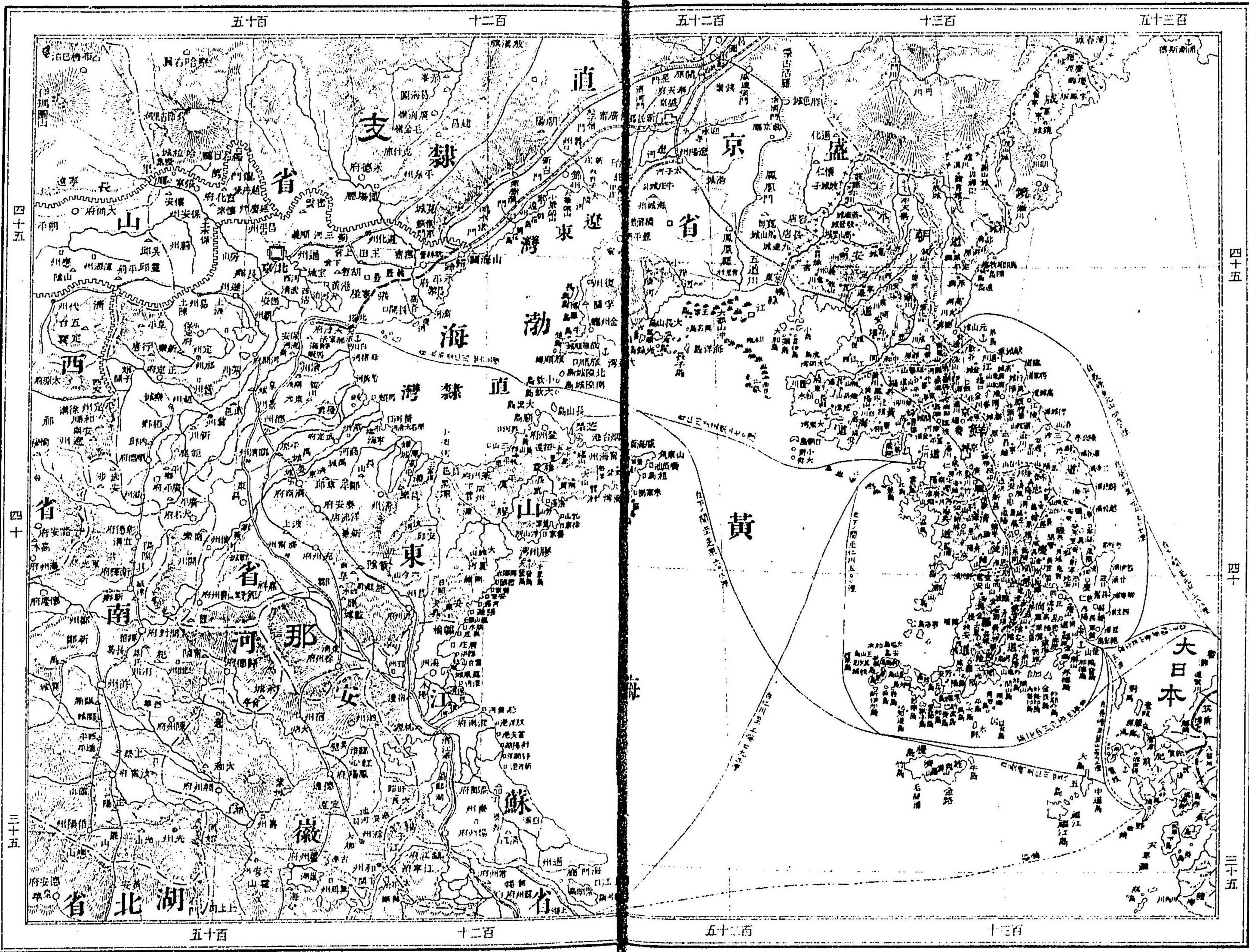
疆域標天日威靈萬國高懷柔 皇德威招撫  
 習恩勞遠多殊優遇貴賓厚寵褒三韓方拜  
 伏惟 獨聽 教若不禁 覲觀 遂將 縱容 強會 群論  
 一辭 牢將 帥多 謀畧 宰輔 富俊 豪

浦傳 施石 裁割 試之 焉刀 典之 島初 聞捷 牙山 存  
 告 逝頑 真何 悔過 克集 愈增 切義 藉干 戈力 勢須

征戰塵六軍降帝瀾八駿度宮壕曙色開金  
戟秋風動白旄火輪飛電疾鐵騎奮鷲翔  
嶂迎宸眄丹霄御袍龍章臨港口風起車  
林舉田園防護害人民戒繹騷重權煩至運  
大柄仰親操砲怒崩巖骨血流清野苦精  
織巨刃堅艦碎委濤勇進寧多苦長驅益少  
橈遼東平若礪燕北舉如毛雅奏邀田馮凱  
歌賀建嘉王基千載因明世喜相遭

明治廿七年十月

依田百川具稿



五十百

十二百

五十二百

十三百

五十三百

四十五

四十

三十五

四十五

四十

三十五

支 隸

京 省

西 省

南 省

河 那 省

東 省

蘇 省

北 湖 省

徽 省

直 隸

海 渤

山 東

蘇 省

黃 海

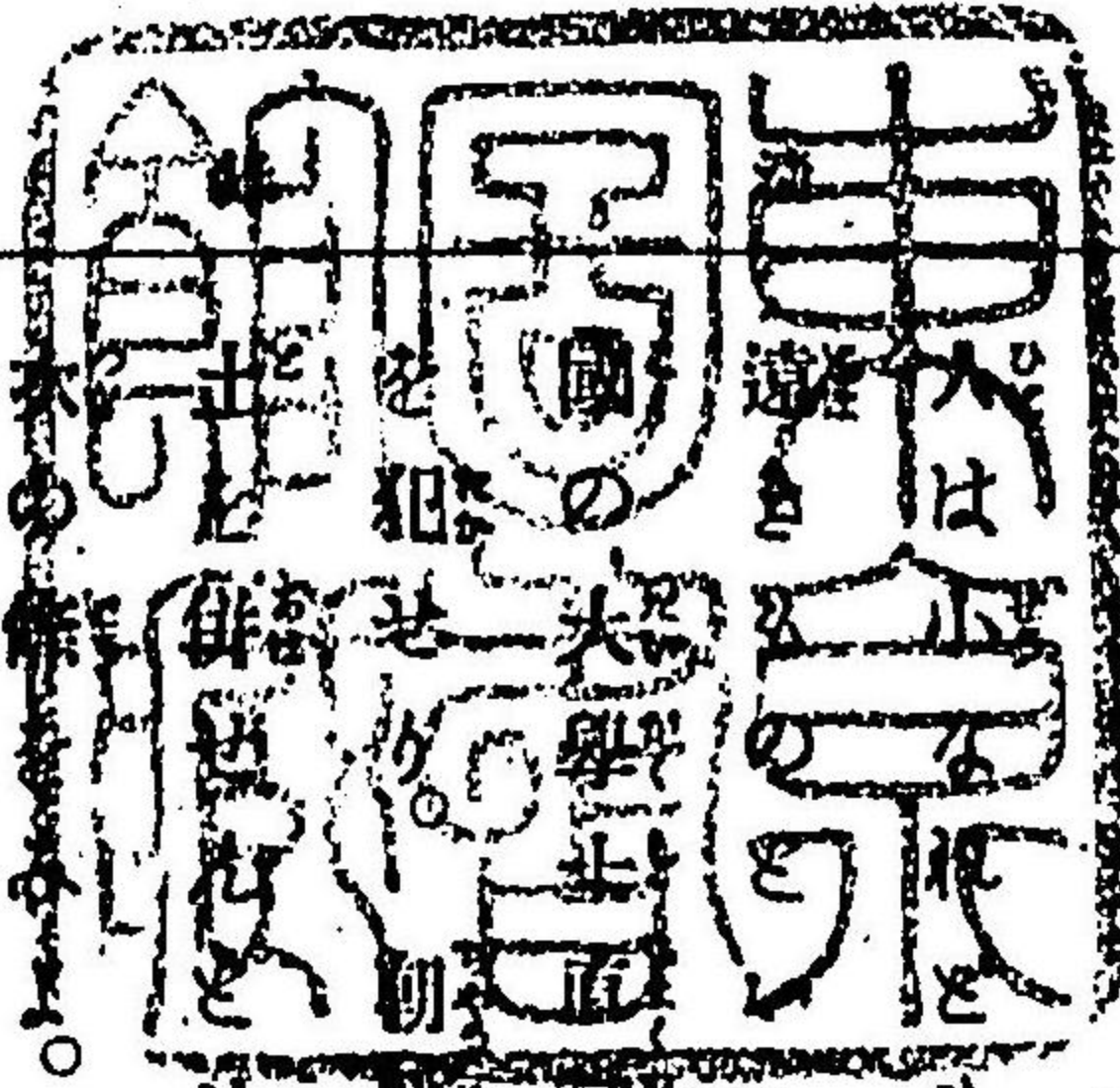
大 日 本

# 征清錄

隣邦を犯し侮る 小國を恤み憐む



学海居士著



一  
て。我明治の廿七年五月清國なる太沽山海關の海防の用意全く整ひしと  
官吏等之を總督に告ぐ。李鴻章は。屬官幕僚數百人を従へて。

征  
其の膽氣あるものは。侮るべからず。況や國をや。況我隣邦をや。嗚呼清  
國の大勢士氣の衰へども。信義をもて親むべし。況我隣邦をや。嗚呼清  
國の總督李鴻章少筌は。我日本を侮れり。我日本の威  
を犯し侮る。朝鮮國を臣國とし。その全  
朝鮮國を奴隸として視たり。朝鮮國を臣國とし。その全  
これ我等の想像の架空論に非ず。請ふ讀むもの。  
本の條をよみよ。

鼓吹に道を開き。山海關にのぞみて。これを檢閲せり。山海關の形勢は。北海第一の險要にて。遠く渤海を延き。碧水沓茫として。天に接し。陸には山岳の險阻をつらねて。壁壘萬里に蜿蜒たり。此日天朝に風清く。春波暖かにして。濤聲耳を洗ひ。清國の南北洋の艦隊船艦相叩て灣頭に整列し。招商局の汽船も。ことごとく其後についで。烟は空に沖りて。九霄のうへにもたなびく如く。旌旗は風に翻りて五雲の下り垂るゝにも似たらんかし。李鴻章は。外國の諸公使を招きて。海雲號といへる小汽船にうちのり。艦隊の間に往來貫穿し。艦長等舷頭に立て敬禮するを見て。一々にこれに式代して。海風にその微聲を搖し満心の得意を。その容貌にあらはしたりき。斯て盛宴を開き。山海の奇品をつらねて。公使等を饗應しけるとき部下の將吏を招き。軍備を細やかに説き明かさしむ。その言大かた誇張に過ぎて。人耳を煩すを多加れども。公使等は主客の勢誰れ登

人も不の字を説き出す可き。いづれも。その用意のいたれるを口を極めて稱賛す。鴻章口には。謙遜の言を吐くといへども。心はすでに。昇天の勢あり。この時鞍山の風雲やうやくわかれて。日本の聲端やともすれば。開かんとするるときなりければ。この軍備と。この稱賛とを得たる。鴻章の心はその氣すでに。東洋を平呑し。獨林はものかは。蜻蜓の一洲は我國池中の物なりと。いはねど。氣色にあらはれたり。誰かしるべき。干戈一度交ゆるにあたり。豊島の波あれ。その軍艦はやくも傷き。或は生獲られ。牙山の風急にして。二萬の精兵粉齏にせられ。つゝきて平壤の大敗となり。太孤山の驚濤天を捲きて。艦隊半をすぎて。海龍王の朝飯の珍味とやらんとは。檢閲の三週の時日。いまだその期を盡さず。朝鮮駐在の袁世凱より電報あり。東學黨の勢さはめて猖獗す。これを平ぐるは我利なり。と。これはかの韓國の閔泳駿が衰に托して。清兵を延き。一はその

力をかりて。國王を制御せんとし。一はこれをもて。日本を威嚇せんとする。いと淺はかなる謀に出しとしらる。鴻章はこれをしるやしらずや。直に駕をうながして。天津にかへるに。世凱もまた窺に天津に歸りてつぶさに。日本が我に備ふる事を告ぐ。鴻章こゝに於て心動き。遂にその部下の名將と聞えたる。提督葉志超(字曙卿)總兵官聶士成を派遣して。東學黨を平ぐるの任を帯び。かねて日本に備へしむ。その心果していかん。一舉にして。韓人の心を服し。日本の威をとりひしぎ。雲鵬萬里の志を展ひとするに非ずや。そもく。朝鮮を奴隸として。永く臣國とするの策ならずや。あはよくば。王を廢し郡縣として。内地の流官を置かむとするにわらずや。この時いつれの公使にやありけん。これをききて。同じ同盟の公使とともにも。鴻章のもとに至り。兩國もし和平を破り。戰に及ばぬ。いづれも大害ありと説きしかど。袁世凱は朝鮮にふもひき。頻りに。

日本懼るゝに足らず。我兵一たび足をわぐるときは。彼を破ると瞬間を出でず。といふ。こゝに於て。鴻章心にかもふやう。勝敗の數はしるべからず。されば。吾兵一度やぶるときも。我威海旅順のかためは。天下無雙の要衝なれば。やはか。これを踰て。一歩をもすまざるべき。ましてや。山海太浩の砲臺は。五大洲にも比類なき所なりど。かの國の人々もいひしげかし。蕞爾たる日本國何ほどの事やはある。あはよくば。我軍艦をもて。かの馬關の海峡に突き入りなば。その砲臺を碎き。波濤を蹴開き。直に東京灣に入りて。城下の盟を爲んとかたからじと意中に決し具さに。その形勢利害を狀して。兵を朝鮮におくり。機會をみて。事を行はんことを總理衙門に求めけり。されども。かの禮親王をはじめ。内閣の軍機大臣領劄和布等は今日に在りて。日本の和を破るは決して。策の得たるものに非ず。まして。皇太后の誕辰近に在り。この慶事にのみ。凶器を動か

すと。然るべからずとの議ありしにず。鴻章なほも利害を痛論し。今日かれの膽を挫がざるに於ては。他日島嶼の愆を縦まゝにせんこと必定せりと。論ずるとやまさりければ。廟議遂に一決して。機をみて兵をすゝむべきよしをゆるされけり。しかるに。俄に鴻章が議を變ずるに至りし事あり。そをまたいかにといふに。袁世凱朝鮮にありて。しばし國王大臣等をすゝめて。日本の遇待を薄くせしめ。又かの國の人民がしきりに閔氏の放縱をにくむを。反りてこれに厚く交はりて。政務に關涉するよし聞えて。大に人望を失ひしより。日本の勢。やうやく強くおなごり難に及びしと。又こゝに銃砲局俄に火災ありて火藥彈丸を失ひ上海の煤炭もまたやうやく乏きよしを。いふ者ありしかば然するに。鴻章も。大に心を惱ますよしを。かの公使きゝて。再び。和平の事をとさしにず。さらばとて。遊説の事をその公使にたのみ聞ゆ。公使は七月十

日をもて。京城に至り。我公使に向ひて。和平の談に及ぼんとせしに。袁世凱はこれをきかず。曾光煦をもて。鴻章に説きて。石炭乏しども。何ぞ憂ふに足るべき。軍艦は本國より仁川に至るまでにして足れり。まづ仁川を我有とし。すゝみて。日本の馬關に入り。かの炭庫を擧て。もて我用に供すべし。日本おもて強くして。内訖けり。國民その政府に背くもの多く議論一ならずときけり。我その機に乗せんに。四五隻の軍艦もて。彼の膽を寒からしむべきのみと。鴻章意また動く。終に牙山の屯兵をやりて。戦はんとの心を決せりといへり。清國を禍するものは李鴻章なり。李を放逐せしは。袁世凱なり。一人貪戻なれば。一國亂を起す。世凱その死を得ず。また自然の道ならずや。嗚呼鴻章は。侮どれり。我日本國を。犯せり我日本男兒を。侮どり犯されたる日本國の日本男兒豈このまゝにして止まんや。

土地を利し。貨寶を食るを食兵といひ。國家の大を恃み。民人の衆を誇る。これを驕兵とす。これ皆義に背き。禮に背き。必ずやぶれ。必ず亡ぶ。己に加えられて。止むを得ざるを應兵といひ。亂を救ひ。暴を誅するを。義兵といふなりけり。朝鮮の小弱を憐みて。これを救ひ。支那の壓制を解きて。人民を獨立せしむるは。これは日本の義兵ならずや。大を恃み。衆に誇る。かの驕兵。朝鮮をもて臣屬とし。終に併呑せんとする食兵を破るに。何の難き事かこれわらんや。且又これのみに非ず人々きかずや。晋齊明天皇は百濟が新羅李唐の爲に亡されたるを救ひ玉はんとて。海内の大兵を擧げて。かの地に渡海せしめ。萬乘の貴をもて。遼陬に陣をうつさせおはしまし。日夜の軍議につかれさせ給ひて。身を西海の露と消給ひしはこれ何の爲ずや。強弱を凌ぎ。大小を侮るの殘虐を憤らせ給ひて。そを擧も静めて。滅國を興し。絶世を繼むとの。大御心にあら

ずや。惜きかな。悲しきかな。皇天これを佑け給はず。事業中ばにして成らず。晋將軍秦の田來津白村江の戦に死して。百濟終に新羅と李唐に亡されき。かの蕩々として流るゝ白村江は。これ今の大同江なり。百濟の都と開けたる。避城は今の平壤なるを。しるや。しらずや。晋皇上が朝鮮國王が。かの驕傲なる滿清の爲に。併呑せられんをいと惜ませ給ひて。軍國の財を惜まず。陸海の兩軍にみことりて。飽までも。道に背きし驕貪の兵を皆殺にして。八道の民に皇化をかふむらせ。朝鮮を宇内の獨立の國と爲しめんとし給ふ。大御心は。齊明天皇の遺志を繼がせ給ふものにして。いとも。有難く辱なき御心にあらずや。小國を恤み憐むは。晋日本國の義俠なり。驕傲の國人を逐ひも。退けて仁風をもて。かの民を蘇生せしめむとするは。我皇上のめぐみなり。大臣その大御心に従ひ。公使その命を辱



めず。みよく。のちの條をみよ。

公使朝鮮國に政事の釐革を勸む 京城に一小戦を開く

明治廿七年六月我全權公使大島圭介八重山艦に駕して。九日朝鮮の京城に入るこの大島圭介は其名を純彰といひけり。もと。播磨赤穂郡細念村の人にして。父祖累世醫をなりはひとす。圭介初め。江川氏の門に入り。西洋砲術を修め。のち。江川のすゝめによりて。徳川幕府に仕へたり。戊辰の變に。歩兵一千六百人と下總に走り。野州奥州の間にて。官軍と戦ひ。のち箱館に至り。陸軍奉行としてなは官軍に抗敵せしが。明治二年歸順して。罪をゆるされ。少議官となり。開拓使に出仕し。數年を経て。清國駐在公使となり。廿六年朝鮮に駐劄せり。今年六十歳。英氣なほ凜烈として。少壯に異ならず。さらに。加ふるに。多年世故を経たるをもて。練磨の功ます。

加はり。大任を帯びて少しも騒ぐ色なきは。まさに此人の本色なるべし。

さても大島公使は。全權の任を受けて。朝鮮に入り。清國に向ひて。牒するよしあり。その意は我國と。貴邦及び朝鮮とは。東洋の中にして。土壤相接し風俗相似たり。されば。治亂ともに自らその利害得失をともにするの勢あり。まかるに。朝鮮政綱みだれて。土寇起り。これを制御し。これを鎮壓するに苦む。これ我國の憂とするのみならず。貴邦もまた。その痛痒無きを能はざるべし。庶幾貴邦我國と厚く商議を盡しめて。朝鮮國に向ひ。政事を釐革し獨立自治の實を擧げ。將來の禍基を絶ち。百年の計を定むとす。これ唯かの國の爲に。その獨立をたすけて。東洋平和の大局を立んと。意に出たるなり。他意あるに非ざるを察し給へどありしに。清國の政府はこれに答へて。東學黨の亂すでに平ぎぬ。我兵もまたこゝを去るべ

し。貴國の兵も撤せられよ。その商議の事は。同意すると能はずと。されば此時我國の混成旅團長大島義昌は兵を率ゐて公使にふくる。と七日にして。京城に入れり。これ我人民が土寇の爲に劫略されんを恐れて。保護を加へんとするが爲なり。清國はやくより。朝鮮の請を納れて。數千の兵を牙山に屯し。土寇平げども。去る氣色なし。その意兵威をもて。我に抗し。朝鮮を壓制し屬國の實を行はんとするのみ。

みよや人を。我國の公平正大なる。權謀術數を用ひず。威嚇劫制によらず。正理をもて論じ。輿論につきて發す。かの清國はこれと異なり。密に朝鮮の權臣を教唆して。表に獨立の体を装はしめて。陰に屬邦の例に従がはまめんとす。表裏同じからず。言行一致せず。ましてや。袁世凱が如きは狐鼠の黠謀をもて。人を欺き口に仁義を唱へて。心に榮利を謀るを。かの文祿朝鮮の役の時の沈惟敬に似た

るものをや。鴻章これを信じて。帷幄の謀臣とたのみしは。いどもかろかなる事なりかし。

清國政府の答かくの如くなりければ。大島公使は今は清國もたのむ可きに非ず。朝鮮すでに。諸同盟の國にむかひて。獨立を稱せしうへからは。何を憚りて國政の釐革を行はざる可きと。かの政府に向て忠告せし事は。五ヶ條なりき。そは。議政府の制度を明かにし。地方の制度と貫通し。人材を選擧すべし。これ一つ。財政を整理して。その消費の數を明かにし。その賦課の道を審にすべし。これ二つ。法律を定めて。人民裁判の法を立べし。これ三つ。兵備と警察とを嚴にして。國內の變亂を蕩平すべし。これ四つ。學政を立て。教育を盛に行ふべし。これ五つなり。なほそのうちに。二十五條の目を備へて。これをかくれり。

國王聰明にして。時勢の變遷を知れり。こゝをもて。公使が説を納

れて。やがて。群臣に命じ。弊政釐革の委員を定め。七月十日をも  
 て。これを議せしめしかど。群臣なほ舊習に慣れて。新政を喜ばず。  
 されども。このまゝに已むべきならねば。明年十一月なほ會議を開  
 きて。論評せしかど。決する所は。瑣々たる小事にすぎず。もて舊  
 習を一洗するに至らず。かゝりしほどに。かの袁世凱はいかにして。  
 朝鮮の君臣を欺き。いかにして威服せしめけん。忽ち政府の議一變  
 して。我公使の忠告をいれず。弊邦若し貴國の説に従はんとするか。  
 諸國もまたこれにつらき。兵馬をもて。要求するに至らんとす。弊  
 邦甚だこれを病む。且貴國の兵を弊邦にとむるや。民心これが爲  
 に動搖し。物情恟々として鎮壓の法にくるしむ。願くは貴國すみや  
 かに。屯兵を撤して。人情をやすくせしめよ。しからば。弊邦の政  
 事釐革も。意にまかせて行ふべしと答へたり。その事實に意外に出  
 たり。讀むものこゝに至りて。如何なる感起すやらん。國王すで

に公使の忠告を納れしに。俄にこの言を爲す。豈たのむ所なくして  
 然らんや。おもふに。權臣閔泳駿等の一黨改革は決して。その黨に  
 利ならざるを知り。袁世凱に機密を告げてその謀を求めしに。世凱  
 もまたこの好機會に乗じて。朝鮮を願使して。かねての計略を行は  
 んどして。この答を爲さしめしと知らる。もしこの言をききて。我  
 公使撤兵の舉おらば。これ狡奴の賄計に陥るものなり。これ始あり  
 て。終なきものなり。小國の大國に呑噬せらるゝを坐視するものな  
 り。公使の遠計深謀と勇斷果決の性いかで。これを忍ぶ可き。  
 こゝに於て公使は廿二日をもて。朝鮮政府に向ひ。貴國すでに獨立  
 たるよしを。各國に向ひて。告げしからは。いかにぞ。清國の正  
 朔を奉ずべき。速やかにこれをやめて。自國の正朔によるべし。又  
 賀慶賀正等の使をかくるは。これ屬國の体をまぬかれず。これを罷  
 めよ。又牙山に屯營する清兵を撤回せしめて。かれの關涉制壓をき

く可らずとの。三條を要求す。意明かにして。言簡なり。その返答  
 遅々たるべからず。よろしく廿二日をもて決せられよ。もし答ふる  
 と能はざれば。本使は自ら本使の職任を盡しもて。我日本國の面目  
 を完くし。且貴國の爲に決斷する所あるべしとなり。それ藥限眩せ  
 ざれば。その病癒へず。朝鮮國の病すでに膏盲に入れり。和緩の藥  
 を投じて。反てその病を益すは。豈策の得たるものならんや。公使  
 こゝに心を決せしは。獨我國の威を輝かすのみならず。かの國の爲  
 に安全を謀るの良策なり。  
 韓廷にては。如何なる議ありけん。國王もいかに思はれけん。その  
 詳なるはしるよしあらねども。袁世凱の言を容れて。かゝる答をせ  
 しからには。我日本を侮りて。よく爲すとなしと思ひしにこそ。さ  
 れば。廿二日の期限に至れども。寂として答ふる所なし。廿二日の  
 夜我公使館にては。かねて用意ありけん。我屯營の龍山に報知する

とありと見えて。護衛の備整然として。定まれり。その夜軍隊に命  
 下れり。明る廿三日午前四時より行軍すべしと。その機密は少しも  
 もるよとなし。  
 鷓鴣鳴を報じ。東方やうやく白むころ。公使正服して入朝の用意あ  
 り。京城の四門すでに開きぬ。我軍隊はいつのほどにや。王城の四  
 面をかこみぬ。恰も午前の五時を報ず。  
 さても。我兵は公使を護して。城門に入らんとす。その兵分ちて。  
 二隊とす。一隊は光化門に向ふ。少佐橋本これを率ゆ。これを正門  
 とす。一隊は少佐森これを率ゆ。彰化門に向ふ。これを後門とす。  
 公使正門に至りて入らんとす。韓兵これを遮りて入るをゆるさず。  
 忽ち砲を放ち。狙撃するものあり。我兵大に怒り。韓兵無禮なりと  
 のゝしり。まづ門前に屯せし親軍壯衛營を。吶喊の聲に逐ひ走らす。  
 その勢に乗じ。門壁をうちて聲をわけ。公使國命を奉じ入朝す。こ

れを妨ぐるは何物ぞと詰る。されば公使本館を擧するとき。王城は。これ國王の居る所なり。みだりに。無禮を致して。王を驚すと勿れ。遮るものあらば。これを逐へ。砲を發するとも。丸を用ふるを勿れ。もしかれより發するときは。己むを得ず。これに應ずべきのみと訓令しけり。我兵もどより。紀律を守りて暴行を爲さず。こゝをもて。かれの無禮を忍びて。初めは砲を發せざりしなり。しかるに韓兵等は。これを侮り容易に我公使をいれず。後門の守兵すでに。砲を發して。我を拒ぐ。こゝに於て一喝の號令起りて。轟然砲聲發す。飛丸風を截て。空を飛び。砲烟燦然として地を掩ふ。我兵入れり。韓兵走る。銃器狼藉として。地上に委し。のがれんとして。のがれ去らざるを得ざりしものは。合掌して。命を請ふ。我兵叱してこれを去らしむ。但見る。光化門の二層樓上には。燦然として。日章の旗影風に閃めけり。

我兵四門の鞏固を嚴にし。みだりに人の入るをゆるさず。公使は端然として。景福宮に朝し。禮を失はずして。國王に謁見を請ふ。意氣激昂せず。言語奮勵せず。あゝ公使なるかな。我一隊の兵右營左營の兵をも撃ちはしらし。京城全く鎮定して。夕陽すでに山の端にかゝれり。此日は韓兵三春門内に屯して。我兵と戦ふ。隆武堂の左右の廊に韓兵二人を斃す。又觀稼門外に十餘人の韓兵ありしが。二門の大砲を備へて。我兵を撃たんとす。我はやくもこれをみて。走りかゝりて。その四人を斃し。十人を逐ひ退く。かくてその砲を檢みするに。爆裂彈を装藥せり。もしはやくこれを斃さたらんには。この砲の爲に死傷するものありしなるべし。これ又我兵士等が機敏をみるべし。我將校等がよく兵を用ふるを見るべし。韓兵宮門をすて。後山にのぼりて。やゝ支へたりしかど。遂に敵すべからざるを知りて。皆走れり。その死するもの十七名負傷者六

十餘名あり。我騎兵一人死して。歩兵の傷を負ふもの二人に過ぎず。我手に獲たる大砲十五門小銃は千餘口に過ぎ。公使は國王に面謁して已を得ずして。兵士等を逐ひ退けたるをもてし。つぶさに。使命の事を述べ。國王赧然として恥る色あり。我いかに貴國の好意を知らざるべき。權臣の爲に蔽塞せられ。又大國の爲に制壓せられて。事ここまに及べり。今よりのち謹て貴國の懇切なる忠告に従ふべしと厚く。その好意を謝す。是より先に國王使をもて。國太公李呈應をめす。辭して。去ばらく出でざりしかば。我國の志士等私にその邸に至りて出るを勸む。公使も。また兵を遣はしてこれを護衛せしめしかば。即ち起て宮にいる。これこの日の十時の頃なりけり。さても國太公は國王の生父なれども。閔氏權を専らにして。公を政事にあづからしめず。公は嘗て閔氏の族を滅せんとして事ならず。清の馬建忠が爲に謀られて。去ばらく清國に幽囚

せられしが。のち國にかへるを得たりしかど。王もまたこれを見ず。雲岫宮に籠りて。人に對面せず。不平に年を経たり。ここに至り。一朝專權の大臣等日本の兵威に恐れて。宮中を逃れ去りしかば。公はじめて。宮に入るとを得て。國王に對面す。王みづから走りて出で迎へ。相擁して。啼泣し。世子もまた袖を引き裾をどらへて。悲喜交も至れりどぞ。げに父子祖孫の間さもあるべし。抑公は今年七十餘鑿鑿として。壯年に異ならず。はじめは外國の風俗をにくみて。専ら文明の利器を斥け。我國人をも蛇蝎の如くに視たりしかど。こたびの一舉はじめて。日本國の使臣等に。護衛せられ。父子の對面を得てしより。きのふの非を悟りやしけん。王をたすけて。はや國政を釐革せり。一非一是悟るに早きは。また一の豪傑とするに足んか。

大鳥公使は國王に謁し。宮中にどまると。此日午後第二時にして

辭して。使館に還る。露國の公使は書記を我館に遣はし。兵をもて  
 王城に迫り。大臣を黜けしは。これ何の意ぞ。公使少しもためら  
 はず。朝鮮内政を改めんとして。國太公を起さんどす。まかれども。  
 權臣これを遮りて入らしめず。王これを憂へて。兵を我日本にかる。  
 使臣隣邦の好を重んじて。直にこれに應ず。まかるに韓兵等みだり  
 に。戎器を弄して。我を撃つ。これ日本國に對し。不禮を行ふのみ  
 にあらず。その君に向ひて。兵を擧るものなり。此一小戰實に已を  
 得ざるに出づと。露の公使また言所なし。かくて。國太公は王宮に  
 どままりて。内外文武の政務を身に擔任し。姦を黜け。賢を擧げ。  
 弊政こゝに一新せんどす。まづ金宏集を擧て。首相とす。金宏集は  
 世家名門にして。文學に長じ。人望あり。蓋委任その人を得たりと  
 いふべし。軍國機務所の一衝を設け。總裁一人副總裁一人議員十人  
 より二十人を置き。改革の事を議定せしむ。次に議政府。外務。内

務。度支。軍務。法務。農務。學務。工務の八衝門を置く。各大臣  
 一員を置き。これを統理す。その他改革蓋正する所甚多し。事朝鮮  
 の内政にかゝるをもて。略してのせず。  
 嗚呼國の大事を成さんとするには。志慮周密にあり。まかれども。  
 これを行ふに至りて。唯一の斷の字あるのみ。大島公使本國の訓令  
 を受けて。事に従ふといへども。この一舉實によく斷を行ふといふ  
 べし。さればこそ。王も迷夢を破りて。朝日の光をみるが如く。妖  
 雲一掃して。碧天こゝに朗然たるなれ。  
 今こゝに朝鮮の官を設くるの制度をみるに。多は我内閣の官名に類  
 せり。これ獨り我文明の治を欣慕するのみに非ず。文明の治を布ん  
 とするもの。この官制によらざれば。行はれざるを知るべし。朝鮮  
 すでにこゝに着目して。蓋革を行ふ獨立の實必ず行はれて。清國の  
 稱絆を脱し永く。東洋の一國たるべし。これまかしながら。我皇上

の仁澤にして。齊明天皇がむかし百濟を興復して。それに永く國を  
保たしめむとの。大御心と千古同一轍といふべし。

我海陸の兩軍朝鮮に向ふ

これより先に我政府は。朝鮮の事急なるを早く知りて。その兵備を  
嚴にせんとするの意に決し。まづ。その出師の令を廣島の第五師團  
に下せり。蓋先ずるときは。人を制し。後るときは。人に制せら  
るゝの機を知れり。この時師團長は。陸軍中將野津道貫なり。時は  
これ六月五日午後一時とす。これと同一海軍出師の令を吳港の鎮守  
府に下す。道貫電報を得て將校を會し。充員召集を議定し。各縣に  
通知して。市街に掲示す。斯くて。大砲を三發して。非常召集を戒  
め。警察署には。警鐘を鳴らし。これを告ぐ。既にして。遠近四方  
の郷吏村長等は。鉦を鳴らし。鐘を撞きて。これを告げ。憲兵は即

夜各郡に出で召集に力を盡す。その方法順序あり。次第あり。事急  
なれども。敢て慌てず。令速にして行はるゝこと疾し。しかれども  
これ等の召集は皆充備の爲にして。即發の兵に非ず。もて我軍法の  
周詳なるを見るべし。  
司令部は補充員の召集と同じく。吏員を派し糧食を用意す。これも  
かねて。その方法順序整ひたれば。唯法に準して。これを行ふのみ。  
一朝にして。事辨ず。派遣の兵は第五師團のうちに就き。一隊の混  
成旅團を編成す。こゝに於て。松山分營の第九旅團長陸軍少將大島  
義昌をもて。これが長とし十日に至りて出師の用意全く整ひ。令の  
下るを待つ。十一日令下りて。舟師廣島を發し。前にしるせるごと  
く。十七日をもて。朝鮮には入りしなり。  
又海軍は海軍中將伊東祐亨常備艦隊司令長官として。松島艦に駕し。  
常備艦隊吉野。大和。武藏。高尾。千代田。筑紫。赤城。鳥海等の



艦船を率ゐて。韓海を巡邏して。一朝事あるときは。一輩の下に萬艦を撃ち碎かんとす。海陸の軍備はかくの如く。すでに人に先ずるの形勢なり。宜なるかな。豊島の一戦。はやく清艦を降したるや。撃退たるや。又牙山の役敵をして狼狽措とわたはざらしめたるや。かの驕傲なる李鴻章の頂門に一鍼を加えたるや。

豊島の海戦

我日本國と清國との戦は。まづ豊島の海戦より端を開きたり。これより先に李鴻章は。すでに葉番の二將に命じて。牙山に屯せしめ。東學黨平げども。敢て兵を撤せざるのみならず。ますます増發して。勢を示し。又義州の地方にも兵を出し。牙山の兵は京城にせまり。義州の兵は平壤より出で。ならびに我兵を挾撃にせんとす。しかれども。表に決絶の形を示さず。隠にその準備を怠るとなし。太沽旅

順口威海衛より次第に兵を朝鮮に送り。一時に志を展んとす。果して我が國これを察するの機敏なからましかば。危ひかな危きかな。しかるに。我陸海軍の將士はやく悟る所あり。海軍中將樺山資紀すでに海軍司令部長となり。急に佐世保に赴き。諸艦に號令を傳へ。軍略を示し。七月廿三日纜を解き。仁川に向ひて發す。その諸艦は。これ何々々。吉野。浪速。秋津洲の三艦なりき。黒烟空に騰りて。海風に靡き激浪船腹を撃て。白雪を漲らす。一日を隔て。廿五日の午前七時朝鮮の山々。翠の色を呈し。洲嶼は黝くとして碧琉璃の益に散ず。曉風面を吹きて。軍士の戎衣を涼くし。日光紅を漏らして。海雲鱗の如し。すでに船は豊島のはどりに近くほごに。とみれば浩波天に接する所忽ち二隻の軍艦あり。烟筒雲を吐きて。飛が如く。南陽灣より我軍艦に向ひて馳せ來れり。黃龍の旗半空に閃き。問でも知るき。清國の軍艦なり。これを濟遠號廣乙號とす。

さては。牙山に向ふなる。陸兵をのせたる運送船の來るをしりて。これを迎へんが爲に至れるにこそと思へども。此時はまだ。我艦は廿三日京城の變を知らざれば。強にこれを視て。敵とすべくもあらず。凡そ各國軍艦相逢ふときは。艦將の旗を揚ぐるをみて。これを敬禮するが爲に。又旗を揚ぐるを禮式とす。かゝりしかば。我軍艦例に従ひて將旗あり。彼これをみたらんには。禮式あるべしと思ひしに。豈測らんや。唯敬意を表せざるのみにあらず。砲門を開き。戦の用意せり。

すはや。敵艦は戦はんとするぞと。我軍士等は腕を振して向はんとす。まかれども。このところは海面狭く。進退操縦そのたよりよろしからず。よりにて。まばらく。彼の無禮を咎めず。艦隊の方向を南西に轉じて。洋面に出たり。海波を蹴りて進み近く。彼我の戦艦彼ははや。我に向て轟然と一發す。されども。狙ひはづれて。海中に

さんぶと落つ。來れ。敵艦我手なみを見よと。我艦よりも打ち放つ。白烟湧き。黒霧みなきる。運轉自在。飛が如く。艦旋任意舞ふに似たり。巨彈破裂して。鐵片紛披し。蒸氣洞穿せられて。熱湯盆湧す。人は叫び。砲は鳴る。激戦すでに一時を過ぐ。清艦よく戦はざるにあらざれども。いかで。我の銳威に敵し得ん。廣乙は早く。のがれ。濟遠ははや降旗を立たり。我艦まばらく砲を止めしかば。濟遠は水雷艇を放ちてその虚を撃んとせしに。機發せず。我艦將忿然として。はげしく撃立ければ。かなはずして逃れ走る。吉野艦は通がさじものをも。疾風の如く追かけて數發放ちし彈丸に。その甲板の機關室を打貫ければ。おはや。沈まんぞと。されど。彼は淺瀬をおそれず。命かぎりのがれしかば。遂にそのまゝ引かへしけり。かゝる處に。かの運送船は沖の方より。馳せ來れり。これを護送するは。操江號なりけり。のがすな。打沈めよと。我秋津洲艦は波を蹴立て馳せよ

せけるに。その勢にや怯れけん。かれは。唯一戦にも及ばず。白旗を船上にかゝげ出して。降服を示しけり。凡そ敵に降るは。まづ敵の旗をおげ。その下に白旗を掲ぐるを例とせり。まかるに。操江號は白旗を上におげ。日章旗をその下にわぐ。その恐慌の体これにて知るべし。その船將は王永發とて。させるものにもあらざりしに。貨を納れてこれを得たりと開ゆれば。さる淺間しき事をもせしならん。人のちにこれを評せり。秋津洲艦は。その降を納れて。船將を我艦にうつしのせ。盡くその兵器を收め。我軍士に命じて。のり移らしめ。ここに。我大旗船上に掲けり。浪速艦はすでに。運送船の高陞號に近き。まづ空砲を發し。信號をもて。その行をとどむ。かくて短艇を下し。人見大尉をもて。これを検査せしめしかば。この船は英國の船にして。清國にやどはれて。清兵一千餘人をのせて。太清を發し。牙山に向ふよしを知る。我は

その船長に向ひ。本艦に来るや否を問ふ。船長英人コルスウオーシは。吾は今助なし。一に貴命に従ふべしと答へ。且つ短艇を求む。我すなはち。これを送る。まかれども。船長來らず。我は貴命に従はむとすれども。いかんせん。清の兵士等これをゆるさず。船を太清にかへさんとを求む。この問答の間に清兵盡く甲板に上りて。我に敵せんとし。船長等はすでに清兵の爲に。脅迫せられて。これを如何ともするを能はず。我艦これをみて。信號をもて。汝この艦をすてよといふ。彼又短艇を送れと答ふ。我は汝みづから。短艇にのりて來れといへども。清兵我を許さずと答えて。事ゆくべらもあらざれば。我艦ここに至り。赤旗をかゝげたり。是すでに決絶を示せるなり。これと同時に我一發の砲聲鳴わたりて。はやくも。機關室に命中す。轟然又轟然數發の巨砲かの船にわたりて。泣聲罵聲ともに起り。一千幾百の清兵忽ち海底に沈みけり。此時英國の船長船

手等争ふて。水に投じ。のがれたるもあり。死せるもあり。我短艇にて。救ひしもありき。海戦こゝに終りを告ぐ。白旗をあげて。我を偽りのがれし濟遠號萬死のうちを。のがれしかど。砲彈を受くるを。最も多く。その船長方伯謙は大傷をかふむれり。又艦中軍士にも死傷多くして。身體粉塵して。その軀をどかめざるものあり。威海衛にのがれて。修繕せしとき。外國人これを親くみしに。血痕艦中に狼藉して。一見人をして。戦慄せしめしどぞ。我軍士等の砲を發つに妙を得たるを知るべし。又廣乙號は。本國にのがれかへること能はず。廿七日我高千穂。摩耶の二艦その踪跡を探らんと。近海にかもむきしが。短艇をもて戰場に近き島くをわさせしに。カロン灣といへる海灣の西なる灣口にその横はるを見き。短艇の軍士等近づきてよく見るに。この艦は一等水雷砲艦にして。速力十七海里を走るべく。十二珊のクル

ップ速射砲三門六斤速射砲四門及機關砲數門水雷射管四箇を備へたるものなり。火藥庫を我砲彈にうたれて。破裂し。艦体半は水に入りて。つばらに。これを檢みするによしなし。おもふに我發砲の爲にその緊要のところを破られてのがれしかば。あやまちて。淺沙にのりあげたれば。己を得ず。火藥庫を焚きしものか。或は先に我砲の爲にうたれたるか。その本部は多く焼け失ひ。艦首より。凡そ三分の二の所に至りて。中斷して。水に没せり。甲板はその銅骨を露はし。その十二珊の砲はなほ用ふ可きに似たり。右の舷のかたはらにある砲の側死屍累くと伏しかさなり。艦橋のもとなる司令塔の羅鐵盤信號旗はいづれも。粉塵せざるは無く。そのうちに。立のまとなる屍骸をみる。蓋し艦長なるべし。その外屍骸多くあれども。水に浸せるがうへに。腐敗して。その臭鼻を向く可らず。こゝをもて。その數を算するを能はず。又我より放ちたる砲彈は極めて多く。

水面を出る所にても。その穿洞せしあど。十餘所をみるといふ。操  
 江號は。すでに。我秋津洲艦に降伏して。國旗を立られたり。斯く  
 てその船員を傲ふれば。八十二人あり。船將は上にいふ如く。王永  
 發にして。大副は孫茂盛二副は徐起鳳といふ。永發は參將なり。浙  
 江省寧波府鎮海縣の人にして。英國軍艦の水夫なりしが。我日本下  
 の關にて長州の藩兵英艦をうちしとき。かの船中に在りといへり。  
 のち水夫の長となりて。終に本國にかへり。この職にのぼりしとい  
 ふ。その人猥瑣いふに足らざるを知るべし。さればこゝに。いとふ  
 かしき物語あり。この俘囚等はじめ我國にひき來りて佐世保より廣  
 島にうつされしが。陸軍の兵士等埠頭に立てこれを護送せんどす。  
 俘囚これを見て。みなその頸を撫して啼泣す。通事をしてこれを問  
 しむれば。我等はこゝにて殺されんか。いかで命一つをゆるし給へ  
 ど泣なりけり。否汝等が命を召さるゝにはあらず。これより。ゆた

かに。檻中に起臥せさすべし。泣くな。泣くなといひしかば。いづ  
 れも。蘇生の思ひを爲して笑ひ榮えしといふ。又俘囚等檻中に入り  
 て。その飲食のゆたかなる。反て軍中に在りしよりも勝りければ。  
 己の俘囚なるをわすれけん。ある日。監守に向ひ。我等飲食は十分  
 にして。いまは足らざる所なし。いかで。本月賜はるべき俸給をわ  
 たされなんには。此上のよろこび無しといひしどなん。かゝるため  
 しは。昔ありや。我國恩徳の敵國にも及びし事感ずるにもあまりあ  
 り。いとくめでたき事にこそ。

牙山掃盪の事決す

朝鮮すでに我公使の忠告に従ひ。大に弊政を改め。朝廷の面目一新  
 しければ。牙山の清兵を撤回せしむべしとの議決し。我國に請ふ。  
 これは我兵のいまだ海戦を開かざるの前に在り。こゝに於て公使は

これを龍山屯營の我旅團長大嶋義昌に告ぐ。こゝに於て。日頃より。清國人等の跋扈して。我を凌侮し。又韓人の無智怯懦にして。唯世界のうち。清國あるを去りて。他の強國あるを知らざる目を醒す。ば。唯この時なりと。いつれも。その心にいさみあり。時はまさに七月廿五日夏雲は奇峰を爲して炎日沙場を照らし。韓山の草木はそよどの風も無く。汗は戎衣を浸すばかりなれども。事どもせず。馬は嘶き。人は躍る。野もせの夏艸踏みまき。唯この一戦に牙山の夢をやぶらせんと。前軍ははや。水原府に至り營を敷き。後軍は果川に至れり。明る廿六日水原の前軍發せんとするに。こはいかに。前日徵發せし。朝鮮の人馬はのがれ去りて。一人も無し。これは例の韓人等唯清國をのみおそれて。我命に従がはず。廿三日の變ありて。韓廷は全く。清國の羈絆を去りて。獨立國とはなりたれども。小民これをいかでしるべき。もし。日本人に従がはば。他日官吏の爲に。

いかなる憂目をや見るべきと。恐れてのがれ去りしにこそ。かゝりしかば。前軍の將陸軍少佐古志正綱これを憂へて。こゝかしこに求むれども。絶てこれに應ずるもの無し。こゝをもて。軍を進むるを得ず。斯る處に午後三時後軍の旅團長はすでに水原に入り來りて。この体を見て大に驚く。正綱憂慮措く處を去らず。この夜已を得ず。全軍また此驛に夜を明かしぬ。明る廿七日の朝正綱にわか。病て死しぬ。今年四十六歳なり。此人山口縣の人にして。中興の初軍に従ひ。こゝに廿七年。西南の役にも進み戦ひて軍功あり。次第にすゝみて。この職にのぼる。その部下を撫する恩威あり。人これに服す。されば。この手に屬せし大尉松崎直臣中尉時山與造等が安城の戦に命を輕し戦ひしは。平日の訓練によるものなり。されば。正綱地下に在りても笑を含むべきのみ。後軍すでに水原に着しければ。この夜はこゝに宿し。まづ士官をも

て。水原府の判官のもとに。宿營を借たるを謝して。その房金を送り。又糧食備夫牛馬の貸銀を數に照らして與えれば。官吏は大にその厚きを謝して。意外の思をなしぬ。そは清兵は過る所はしきまゝに。人馬糧食を徵發して。一錢これに償ふと無かりしに。我軍はこれと同じからず。一夫一馬の價といへども。これをその請ふがまゝに。與えたる事なれば。はじめて。王師の私無を知りて。やうやく我に向ひて。親睦の心を生じき。この日京城より。公使の飛報あり。朝鮮國王が牙山清兵を撃ち退ることを我に請ふの公文をかくれりと報じ。わはせて。國內の民人等を戒めて。我軍のもとひるがまに。人馬を役使せらるべき事を告ぐ。ことに於て。韓民等。はじめて。徵發に應じ。道途運搬のわづらひ無りき。二十七日すゝみて。振威縣に至り。露宿す。明日は敵營にすゝみ。奮進して。その兵を皆殺にすべしと。全軍勇まざるもの無し。二十

八日午前四時に振威を獲す。白嶽峴を過ぎ。七原に着し。さらに進みて。平蕪の迢々たるを睨み。岡巒起伏の間一里あまりにして。素沙場に着す。此は一面の水田にして。ことかしの。高岳あり。樹木多し。隊長號令して。兵士をどよめ。松林のうちに銃を卸して。しばらく憩はしめ。參謀長岡岡は。騎兵二三名を率ゐて。馬を飛ばして。敵營を伺ふ。斯くて向ふをみるに二里許を隔てたる松林馬鬣の如くつらなる所に隠々とし雲の棚引あり。雙鏡をとりて。これをみるに。これなん。敵の驛營なり。しろきあり。青きあり。四面に土を築き壘を設くるものあり。新土の遠望いちじろきを恐れて。雜木樹葉を折りかけて。これを掩ふもあり。黒装の兵士そこを。徘徊せるも遙に見ゆめり。敵堡のひろさは。二町ほどもあるべし。さてまた。半里ばかりを隔て。別堡あり。そのうちに帳幕の如きもの十四五を見る。この二

堡ども一旗高くひるがへりて。多くの小旗これを圍る。敵は前程數  
 里にして。營を結ぶとしられたり。されば。この素沙場といへるは。  
 一驛にして。本道につよく村落二三十戸もありぬべし。やゝ小高き  
 岡のもとに在り。我前軍は。まづこの岡に陣し。後軍はそのうちの  
 かた。五六百米突に陣す。敵は成歡驛の高臺に營す。右には高きと  
 ころによりて堡を築き。中央には。二の砲臺を作り。正面と左右の  
 兩翼とも砲射すべし。その左は歩兵をもて備へしとしらる。さて又。  
 道路はこの驛より。敵陣のなかをつらぬき。一里もあるべし。一面  
 の水田にして。二筋の溝渠東より西に流る。彼我の形勢かくの如く  
 なれば。白日これに向ふときは我に於きて。大に不利あり。おもふ  
 に。その戦は夜襲を用ゆるによるし。もて不意に敵營にせまるをよ  
 しとす。敵の右翼は。岡巒につときて。樹木しげれり。正面はひろ  
 くして。小楯とすべきものなく。左翼もまた岡巒なれども。樹木な

くして。近よるに便なし。されば右のかたよりすゝみて。その樹木  
 のかげによりて襲ふべしと議決して。旅團長は。まづ我兵を分ちて。  
 左右の兩翼とし。右は歩兵四中隊ならびに。工兵一中隊を率ゐ。中  
 佐武田これに將となり。敵の左翼に向ふ。又歩兵九中隊砲兵一大隊  
 並に騎兵一中隊をもて。右として。旅團長大島みづからこれに將と  
 し。敵の右翼のうしろより撃つべしと定めたり。方略すでに定めぬ。  
 轉瞬の間に激戦まさに起らんとす。この夜。星斗爛々として。營中  
 肅然兵士軍令嚴なれば。みだりに談笑せず。唯時々馬の嘶くをきく  
 のみ。我日本國が。文祿の役よりのち。はじめて支那に向ひて陸戰  
 を開く時なりければ。軍士はすべて滿身の膽氣をもて。一拉ぎに踏破  
 らんと。勇むるべし。

安城渡



夜も更渡りしに。星は雲間に隠れ暗澹としてあたりを辨せず。忽ち號令あり。起てど。喇叭を用ひず。號旗を揺かさず。さては我軍計略あり。敵の不意を撃んとするなりけり。午前零時三十分左翼の隊は。まづ發し。つゞきて。右翼また發す。衆軍聲なく。馬嘶かず。唯艸鞋の艸を踏聲のみ。さても右翼の軍は。大尉松崎直臣一中隊を率ゐて前鋒たり。その中の一隊を率ゐて尖兵として。山田少尉これを率ひ。眞先に進む。その第二陣は中佐武田これを率ゐる。その先隊は大尉田邊。第三陣は工兵一中隊にして。大尉藤澤これを率ゐる。衛生隊はその第四陣に在り。斯くて。この隊ゆくと半里あまり。一水あり。深さ膝を没す。これより。又半里にして。安城渡あり。廣さ三四間にすぎず。清兵橋を断て。道を避るに。我兵は事ともせず。踵り入てこれを渡る。その

深さ人の肩を没し。また泥濘人の足を病ましむ。されども。兵士ますくすくみ。また再び。沼澤を過ぎ。水田の畔をゆくに。泥濘益深く。夜色暗黒にして。ゆきなやめども。軍行すこしも滞るとなく。一小村に至ることをキチンと名づく。我軍先隊は。安城をわたり。再び沼澤を過ぎ。はや村中に入りしが。後隊は。やうく川を渡りて。いまだつかず。山田が率ゐし尖兵隊は暗路に迷ふてこの茅屋の間に入りて道路を見ず。松崎もまた路を失ふて。同じくここに集まれり。中佐武田は通辨に命じ。人家に入りて。路を問はんとす。但見る。一の白衣の人走りてこゝを過ぐるものあり。呼どめて問はんとするに。かれは一聲高う叫て。人家に踵り入るとその時。一聲響く小銃に。この人家のうちより。伏兵あらはれて。雨の降るどどく。撃かけたり。すは伏兵ず。ゆだんすな隊長忽ち命を下し。水田にかりたち。堤の

下に伏す。されども。地利あしければ。隊伍の向を轉せんとして。沼澤の塘側を橋にとりて。伏ながら銃を發し。やゝありて。忽ち隊伍を整へ。敵にむかひて進む。その速やかなるを電光の如し。田邊大尉は第二陣に在り。どもに塘下に隊伍を退け。一聲すゝめの號令とともに進み出て。砲を發す。

時山中尉はすこし後れて。沼澤を渡んとするとき。敵ははや。前路に起りて砲聲しきりに聞ければ。ふくれなものと。進めくど呼はりて。水中に躍り入る。心得たりと。つかきて入る者二十餘人。測らざりき。泥深くして。底をしらず。おしや。中尉は先にすゝみしものどもに。水に溺れてうせにけり。後軍はこれにも屈せず。屍の上をおどり越え。水をわたりて堤下に伏し。前軍をたすけて亂撃す。但見る。敵の騎兵あり。一齊に轡をそろえて。我に向ひて進み來る。松崎大尉これをみて。駭れ。進めと。劍光一闪身を跳らし

て。堤にのぼる。潑刺一聲飛丸來て。股を貫くゑと。面倒と丸を扶り出し。再び起て。號令の聲どもに。又一丸。眞甲に礮と中る。殘念といひながら。どうと倒れ息絶たり。怒濤の勢。我兵は銃劍の鋒をそろへて。敵中に突き入たり。或は突き。或は撃つ。馬は倒れ。人は叫ぶ。どつと揚げたる喊聲。どもに清兵は隊伍を頹し。逃出せり逃すな一人も。と砲聲といろき。劍聲鳴る。うたれて死し。突れて倒る。忽ちにして。清兵の死すもの二十餘人。溝に落ち。泥にまみれて。狼藉たり。

此戦は二十九日午前三時八分にして。はげしき戦は三十分餘にして終れり。また一聲の號令ととも。我隊屹と列を正し。暫く息を繼ぎしほどに天明たり。喇叭の聲は。曉雲に響き。朝風すしく吹きて。戎衣きよく。又敵壘に向てすゝむ。

みよや。諸君清兵もまた兵法を知れるが如し。我兵の不意に出んと

するを知りて。橋を断ち。伏を置き。反て我不意に出たり。かれが  
 伏を置きしとき。その心はいかにありしぞ。もし此計圖にあたらば。  
 忽ち日本兵を一撃のもとに退け。續きてこれを追撃し。全軍ひとし  
 く進むべしと思ひしものを。豈測らんや。伏にあふて勢屈せず。不  
 意に出づれども氣撓まず。隊長死して。一軍騒がず。よく進止法に  
 かなひて。忽ちこれを突崩し。左軍ととも。成觀の戦に出わひし。  
 その神速。その敏捷。その勇氣。みよや諸君。つぎの條を。

成歡驛

清國の提督葉志超は本年六十餘歳その身二十歳のときより。長髮賊  
 の亂にのぞみて。しばく戦功あり。武勇衆にすぐれ。謀略等類に  
 超へたりと稱せらる。その總兵官聶士成また兵に熟せしとの聞あり。  
 二將いづれも。李鴻章に厚く委任せられて。この度兵を領して牙山

に屯す。されども。この成歡驛の岡阜は。最も要害よく敵を防ぐ便  
 宜なれば。全力をこゝに聚めて。日本兵を防がんとす。こゝをもて  
 牙山より二將どもに。こゝに陣を移して。衆兵を指揮せしとせられ  
 たり。

天明たり。曉氣清し。旅團長は左翼の本隊をすゝめて。はやく敵の  
 右翼の壘に向ふ。まづ小高き松林に砲兵を列して。敵の舉動を伺ふ。  
 遙に。安城渡の砲聲をきけども。少しも騒がず。肅然として動かず。  
 午前五時を報ず。進めうての號令あり。喇叭の聲起る。我大砲は轟  
 然として放たれたり。目ざすは。敵の右なる第一壘なり。敵もまた  
 これに應じ。飛丸空を躍りて。流星を雲間に現じ。驚電風に駕し。  
 鬼神爲めに泣く。はや。我右翼軍も安城渡よりすゝみしにや。敵の  
 右壘にあたりて。轟々として砲聲響く。天に震ひ。地に振ふ。我左  
 軍は。石榴砲を野戰砲に籠めて。連發せしに。誤たず。敵の壘壁に

あたりて。忽ち崩推す。その鐵片飛び散るとひとしく。敵兵これにうち斃されて。死するもの數を知らず。傷つくもの算をみだす。敵もさるもの。同じく。榴彈を撃ち出すもの少からねども。或は高くして。空に破裂し。或は低くして前に落ち。いたづらに土煙を起すのみ。中るとの多からねば。我軍死傷多からず。かくて兩軍の砲煙殆ど咫尺を辨ぜざるまで。臙臙として。人を見ず。敵の砲丸や、滅じければ。こゝろ。ぬかすな。進めど。喊を咄とつくり。銃劍の鋒先をそろへて。唯これ泰山の崩れかゝるが如く。突進す。敵は驚き。傷くものを見かへらず。倒るゝものを。踏越て。激と崩れて。散亂せり。あゝ。我軍は敵の第一壘を踏み破れり。息をくれす。又第二壘に向ふてすゝむ。その勢益々勵し。されど此第二堡は。敵將の本營にやありけん。構造もつとも堅固にして。その形。四角なり。壁は高く。登へて。望火樓に似たり。敵の精銳こ

のうち在りと覺しく。必死となりて防戦す。小銃は霰の機端を敵が如く。大砲は電の空中に閃に似たり。しばし支ふるものから。我軍ははや。要地によりて。攻め撃つほどに。いかで久く防ぐを得べき。咄喊の聲ともろどもに。敵は走り兵は入る。また忽ちに。陥るれり。さて。此時右翼軍の武田中佐はかの松林のうちなる敵の左翼の第一壘にせまりて。戦を始めたり。はやく。これを撃ちやぶり。逃るを追て。隙も無く。第二壘に進み近く。右翼の敵壘はや。我左軍に陥ぬられたる時と覺しく。砲聲真近に聞ゆるに。敵はすでに浮足になりたれば。進むはこゝろ。喇叭の聲。一齊高く鳴るとひとしく。奮撃突進して。疾風の如く。躍り入る。されば。この敵は。かしこにも。なみくの兵と同じからず。各六連發の利器を携へたり。瞬間に六箇の丸を發つといへども。これを籠め替ふるに。聊か隙あ

り。我兵はちども隙なく。無二無三に乗り入りしかば。無雙の利器も。そのかひなく。忽ち第二堡も奪はれけり。左右の全軍ここに於て。いづれも甲乙なく。各その指す所を蹴やぶり。踏どるかして。はやくも中央の營にあつまり。只一もみにと進みたり。さて。敵兵は滿漢の壯勇のうち。軀幹大きやかなるものを選びしと覺しく。その教練もまた至れり。されども。その將校のともがらは。利をみて。義をしらざるものなるにや。兵士を前にたとして。己は多くその背にあり。唯聲をはげまして。指揮するのみ。しかるに我將校はしからず。すゝむ毎に。兵士に先ち劍を揮ひ。身をすゝめ。躍りわがり。ふどり揚り。後るゝものを劍の鋒先にさしまねく。その勢の決然として。面を向くべうもあらず。こゝをもて兵士等我かくれじとすゝむほどに。敵兵いかで堪ふ可き。されば。午前五時に至りて。敵軍やうやく壘を棄てゝのがれ去り。左右六所の敵壘は。その半頃

に陥ぬりけり。こゝは提督が營所なれば。その標旗一流を始めとして。大小軍旗數面と。大砲數門を獲たりけり。左翼の第二壘は。敵將聶志成が居りしと覺て。その名を署したる將旗あり。帳幕數十張を引きまはしたり。こゝに。いとおかしきは。夕安城渡の戰より引退きてのち。この時はじめて。朝食を食して。いまだ終らざりしと覺。碗箸盤肉こゝかしこに散亂し。碗中の飯半をのこし。又その肉羹も温かなり。釜中の米いまだ熟せざるものあり。あはて騒ぎて。逃げ去りしあといちじるし。骨牌あり。雙六盤あり。賭博に無聊を置したりけん。韻府ある詩集ありしは。然すがに。から人の風雅なるべしと。獲るもあり。よしなき事に目をくらしして。軍議に疎きは敗たるもそのゆへありと。嘲るもの多かりけり。清兵の幕營凡そ八ヶ所あり。丘陵をもて堡壘とし。四方の土を掻き

揚げて。四角の壁を築きたり。そのうちの帳幕はその胸壁と高さを  
 同くし。もしこれを撃つときは。壁をかすめて。そのうちに聚るを  
 いとやすかり。又その壁も厚つからず。我小銃をもてこれを撃つと  
 も。これを貫くこと難からず。又深あるも。甚浅く木の枝を投げ入  
 れて。これを代に。跳り入るに甚やすし。  
 この戦の前後我將校の死せしもの。大尉松崎直臣中尉時田興造のみ。  
 少佐橋本昌世中尉山口陳同じく守田利貞少尉山田四郎は傷を負ひ。  
 兵卒の死するもの三十二人。傷かふむるもの五十人にして。清兵の  
 死傷は五百餘人なるべしといふ。  
 清兵の敵は二千五百餘人あるべし。死傷をのぎきて。のがれ去りし  
 もの千四百人ありしなるべし。

牙山

成歡驛の敵兵ははや。のこりなく散走しけれども。牙山は敵の巢窟  
 なれば。容易に抜き難かるべしと思ふ。この日は。總軍腰覽金城洞  
 に露營しけり。明る廿日午前四時旅團長は第十一聯隊を率ゐて。天  
 安に向ひ。その走路を絶んとし。又武田中佐は後軍二十一聯隊を率  
 ゐて。直に牙山に向ふに。風聲鶴唳をも。敵かどぞ思ふ清兵は。さ  
 のふの一戦に膽落魂褻はれて。いつのほどにかのがれ去りて。はや  
 隻影もどいめざりき。  
 この日の午後四時全軍盡く。牙山に聚り營を張る。されども。不時  
 の變あるを慮りて。敢て少しも油断せず。去かるに。その夜残兵  
 二三十人ばかりありて。俄に夜襲を謀らんとして。おしよせられた。  
 忽ちにして追退く。又旅團長大島及び福島中佐等陣營のあたりを廻  
 ぐりて。敵の有無をさぐりしに。忽ち兩三人の殘兵あり。艸叢に伏  
 しかくれて。彈丸を放ちしに。狙はそれて。飛散たり。護衛の兵士

は走りより。のかしもやらす皆悉く。擊殺てけり。おもふに。敵にも勇猛なるものありて。全軍敗走のあとにのこり止り。大將をうち取らんと。斯くはかりしものにやありけん。その勇は愛すべし。牙山營にや。又成歡の營にて得たりしものゝ内にやありけん。提督葉志超か妻の孫氏が。夫に贈りし書牘あり。細楷にして。文意きはめて。懇到なり。その略にいへらく教匪(東學黨をいふ)この頃。すでに肅清し。日本と和を議するをまちて。兵を徹して歸途につくべきよしをうけ玉はりぬ。やうやく。心落居はべり。まことに和議の説定まりたらんにはよしとは申せども。若しさらぬ事あらば。干戈動とにも至らんか。おもふに。吾夫はたち餘より。ものゝふのわざに従ひ。いつも人の先をかけ玉よし。世に仰ぎまたいまぬらせたれど。今は六そじに近く。御心は猛くましますとも。御とし加はらせ玉へば。いかと御心して。よろず人にうちまかし。士卒の先にす

ませ玉ふな。朝鮮の天氣は。いとあつしとこそうけ玉はれ。柱石の御身をいとはせ玉へ。公事どものいとま〜には。御身をやすらひ玉ふがよき。このまぢ。船の便りもさむらはんに。御ものほしとおぼし玉は。申させ玉へ。便につきてまぬらすべしと見ゆ。此文のうち。その子の事。婦の事。孫の事ものせられたれば。大方四五十歳の婦人なるべし。この文にのする所の意は。なみ〜の婦人の情にして。さるいかめしき英雄の妻とも覺えず。もし我國人のつまならましかば。いかでかくはいふべき。むかし加賀の篠原にて。いさぎよき名をのこし。齋藤別當は七十に近き人とすいふなるに。今に聞えて。武士のかとみとなるは。つねにものがたらせ給ふとうけ給はりぬ。いかでその人にもおどらせ給ふな。若き人〜に。年衰へしとて。笑はれ給ひず。人より先をかけて。我子我孫をもはげまし給へといふなるべきを。から國人のたしへは。さは無りしにこそ。

されば。この人はよく妻の教を守りて。戦の起りしより。いちはや  
 く逃れにけん。又牙山の降虜賈龍徳といへるが。白状には。思の外  
 の事あり。そは。  
 この戦のち八月の廿八日朝鮮の京城に於きて。清兵賈龍徳を糾問  
 せられしに。そのいふ所によれば。清兵海路より牙山に到りしは。  
 かの曆五月五六日の頃なり。成歡の驛の戦に出でし兵は山海關の正  
 定練軍大將は提督葉志超にて。膺臺武毅軍の將は惣兵官聶士成。北  
 塘仁字軍は同じく吳某これを統領す。おはせて十營水雷隊二隊馬小  
 隊惣數凡そ三千二百人となす。砲臺は克虜普八門あり。ともに聶物  
 兵これを率ゆ。正定練軍の携ふる小銃は米國製なり。なほ此外にみ  
 づから好み軍に従ふものあり。これを閑人と稱す。これを各營に配  
 付し。兵十名に閑人二名を置く。兵の給費は三兩六錢にして。各そ  
 の衣服食料を支辨す。毎八錢五分を官に於さめ。又その時に應して。

大號衣の價二兩四錢。小號六錢通常衣服の料一兩六錢及び靴價六錢  
 を支辨するがゆへに。その實を得るものは甚寡し。  
 こゝに意外の事といへるは。成歡の戦いまだ起らざりしに。この俘  
 虜の言によれば。葉と聶との間に。議論合はず。聶は日本の兵來ら  
 ば。これと戦ふべしといひ。葉は清廷ならびに李總督より戦ふべし  
 どの命なきゆへに。戦ふ可らずといふ。議論決せず。葉はそを名と  
 して。戦の前日その部下一千の兵を率ゐて。天安の方に退陣せり。  
 こゝをもて。のこりし兵二千餘人をもて。聶が指揮して戦ひしとい  
 ふ。聶は月峰山の前にある茂林のうちに。埋伏して。自らこれを督  
 せしが。戦盛なるに及び。早くも逃れ去りしに。武備の學生二十名  
 は。大に戦を喜び。この時多く陣歿せり。  
 龍徳いふ。我等は日本兵と戦はんとは。夢にもしらず。こゝに至り  
 しは。袁世凱が處分のよろしきを得ざるがゆへなりとて。一軍これ



を恨まざるものなし。此戦の起るに及び。かれはたちまち逃れて國にかへりしときとて。いつれも。怒み怒れり。又聶は兵をしるどいへども。葉は貪暴にして。部下その用をなさず。もし此時戦にあらば。盡くそむきて。擧殺されしならんといへり。この一戦死せしもの。二百餘傷負ふもの三百名あまり。その餘は盡くのがれ去りぬ。多く馬を雇ひてこれにのれり。又朝鮮服を着して。装を變じたるもの多し。

これによれば。葉は戦にのざまざるなり。されども。今我軍に分擒せしうちに。葉が標旗あり。またその妻のぞくりし書牘さへあるものを。いかで戦に先ちてこれをすて走るものあらむや。俘囚は。葉か爲に拙を掩ふものか。さらずば。軍中の訛言にして。まをとするに足らず。

又更に。意外の事あり。葉聶の二人。この大敗を隠蔽して。反りて。

大勝をもて清廷に奏せしかば。軍賞として二萬兩を賜はり。なほ又陰曆七月三十日をもて。兩將及びその部下に恩賞あり。葉には師を督し。敵を禦ぎ。能く將士をして。命を用ひしめ。力めて。兇鋒を挫く。再び賞給しもて。優異を示すとありて。白玉翎管一支。大荷包一對。小刀一柄。火鏢一把。を授けらる。聶には剛勇巴圖魯の號を賞せらる。江自廉には黃馬掛を賜ふ。その他譚清遠。葉玉標以下十八人にその賞各差あり。又陳亡の將校李大木。劉天培。王國祐。閻起龍。許義友。李玉祥等。追獎せらる。上海新報に見ゆ。戦勝て賞を賜ふとは。普通の事なれども。これは破れて賞あり。明の世宗の嘉靖年中仇鸞といふもの。北邊にて。敗績せしが。宦官に賂賄して。かへりて。厚く賞せられし例あれば。これかの土の末世の弊風古今同じきなるべし。また惟むに足らざる者か。

清國兵馬の強弱はふさて論せず。政事は腐敗せり。人物は委靡せり。

かくては國そのくに非ず。いかでかやぶれざらん。いかで亡びざらんや。

凱旋

凱旋は全勝ののちならざれば行はれず。されど。牙山の掃盪は。これ第一着の勝なれば。朝鮮人等をして。その眼を醒させんには。この儀を行ふもまた。一奇策なるべしとて。行はれしにや。凱旋門は。青松雜樹を聚めて。京城の南一里餘の地に造られたり。牙山に向ひしかたには。凱旋門と云るし。京城のかたには。觀迎門と云らしたり。公使は正服して輿に駕し。館員そのまに從ふ。朝鮮王の使臣李允用軍國機務所員鄭敬源はかのく。その官位の正服を着して。出で迎へたり。これを八月五日とす。鼓聲響き。鐘聲起る。牙山の軍は。かへり來れり。日光赫奕として

夏風帥を靡かす。凱旋の兵隊は。眞先に敵の手より獲たる黃龍の旗二旒を始め。うの餘かの葉。蕤。魏。高。馮など。凡そ二十七旒をかし立。そのつぎに。大砲八門を牛に牽かせて。こゝに集る。公使朝鮮使は大島旅團長を迎へて。慰勞の辭あり。長これに答ふる所あり。萬衆一齊に帝國萬歳を唱へて。その聲雷の如し。明る日祝宴を京城泥岷なる倭城に開き。將校僚佐朝鮮の軍國機務の吏員新聞記者に至るまで。會するもの數百人。この倭城といへるは。そのむかし。加藤主計頭清正が文祿の役に兵を屯せしがゆへに。この名あり。宴初りて。公使まづ起て。朝鮮國獨立の成りしを祝し。次に牙山の軍功を稱して。諸將士の勞を贊揚す。大島旅團長はこれに答て。牙山の小戦はいまだ盡せりといふべからず。豊島の海戦はさらには。その功大なりと。謙遜す。次に新納海軍少佐は。まづ陸軍の功を贊し。海戦のいまだ大なる功を奏せざるを謙遜し。いかで後日かの鎮遠定遠

の如き。有名の敵艦を轟沈しもて。諸君の稱賛を願ふべしといはれたり。又次に朝鮮の李峻鎔起て。我日本の義侠と兵士の誠心を感謝し。さらに進みて。満清の兵を。飽までも懲し。日韓兩國永々兄弟の誼を保んとをのぞむと宣ぶ。次に金嘉鎮俞潑の二人もまた贊稱の辭あり。その他新聞記者も。また頌稱の詞ありてのち。かのく。觀飲醉飽して。宴を散ず。

看よ。諸君。我國海陸の武官互に謙遜して。一勝に誇るをなく。一役に勞をいはず。後來の偉業を期望すると殆ど其廷の遜讓と。その揆を同くす。滿は損を招き。謙は益を受くと。されば海陸の大捷はすでに。この時に胚胎せしといふも。また妄言にはあらざるべきなり。

宣戰の詔

凡そ海外各國文明の治を行ふものは。已を得ず。兵を他國に用ゆるときは。必ず公然として。戰はざる可らざるの意を。本國はさらなり。各國に發表するを例とす。昔佛戰爭の時。兩國ともに。この事あり。その他いつれも然らざるはなし。殷周の君その師に誓ふもの即ちこれなり。明の太祖が元を伐ちしも。また此事あり。もて古もこれ有りしをしるべく。吾齊明天皇が百濟に賜はりし詔もまたその意相同じといふべし。

謹て宣戰の詔を拜讀するに。その主とする所は。吾國家はつねに隣邦に對し。平和の交際を望み給ふと久し。しかるに。清國の朝鮮の事にかきては。かれより隣交の道に背き。信義を失ふの事一にして足らず。殊に朝鮮は吾國よりこれを啓誘して。列國と同盟し。獨立の國となし。清國も初はこれに同したるに。後には屬邦なりと稱し。事毎に其内政に干渉して。兵をか國に出したり。吾國は始終替る

となく。かれを獨立の國となして。その權義を全くせしめむとを謀り。その秕政をわらためんとを忠告せしに。清國は陰にこれを妨げ。終に我軍艦を韓海に要撃するの亡狀に及べり。これ平和をやぶりて。我權利を損傷するものなり。事すでに此に至る。今は和平を持せんとするも。得べからず。已とを得ず。ここに戰を開き。もて我權利をのべんとするとの。大御心としられたり。

清國もまた。その國に宣諭するの言あり。その意を按ずるに。朝鮮は我清國の藩屏たること二百餘年これ中外のしる所なり。近十數年國內事多きをもて。しばく兵を遣はして。これを戡定し。今年もまた。その國の請によりて。兵を遣はせり。しかるに。倭人は故無く。兵を添へて。漢城に突き入り。なほ又兵萬餘をまして。朝鮮に迫りて國政を改革せしむ。その他種々の要挾あり。我朝鮮藩服を撫綏し。その國內の政事は自らおさめしむるのみ。各國の公使も皆いふ。

日本師を出すに名無しと。しかるに。竟に悍然として。願みず。さらしに。陸續として。兵を添ふ。朝鮮の百姓及び。中國の商民日に驚擾を加ふ。ことをもて。兵を出して。これを保護せしめむとせしに。わに側らんや。忽ち倭船ありて。我備へざるに乗じ。牙山の海面にて。砲を開き轟撃し。我運船を傷つく。變詐の情形ことに意料の及ぶ所に非ず。露端すでに彼より開けり。今は姑も容れがたし。よて李鴻章に命じ各軍を派出しもて。韓民を塗炭に救はんとす。もし倭人の輪船各港に入るとあらば。迎撃て殲除すべし。稍退縮するものあらば。これを罪戾に致すべしとなり。

讀むもの。この詔書と諭示とをくらべみよ。朝鮮を我屬邦なりといふ一にあらず。再言へり。何ぞその言の前日の言と反覆せるや。且朝鮮は。むかしより。名は支那の屬邦といへども。實は一國として。他國に交通せり。まことに。屬邦ならんには。いかに自ら國王と

稱して。その上國にかゝはらずして。他國に交を結ぶとを得べき。  
 新羅。高麗の時。且然り。朝鮮となりても。足利氏と交通するに。  
 自ら一國と稱して。明國に關係せずまして清國は。徳川氏と通信せ  
 ず。朝鮮はひとり公然として。使節をかくれり。されば。昔より。  
 獨立の國たるの實有りといふべし。豈これを二百餘年來の屬邦とい  
 ふを得べき。誤れると甚し。且又我を稱して。倭人とす。語にいは  
 ずや。交を絶つといへども。惡聲を出さず。和戰は時によりて。そ  
 の事を異にすども。隣邦は自ら隣邦なり。決して言語の間に醜穢の  
 語を出す可らず。彼自ら稱し文化の國といはずや。しかるに。この  
 語をもて。我を稱す。これ人國に對し。禮を知らざるのみならずみ  
 づからその國を野蠻の地に陥らしむるなり。蓋し倭は。矮と同じく  
 また弱の意あり。もてかの國の我を卑しむるの語たるをしるべし。  
 我詔書は禮あり。義あり。理義端嚴にして。語氣雄大なり。普佛宣

戰の書といへども。これに過ぎず。嗚呼大なるかな王言。

局外中立

凡そ列國戰を交ゆるときは。その交際の厚薄と己にかゝはるべき利  
 害とによりて。同盟して。ともに福禍を同くするは。自然の理なり。  
 然はあれども。その相戦ふの國にして。我と交際に厚薄無く。利害  
 ともに均しければ。己とを得ず。いつれも。加擔するを無く。その  
 爲すがまゝにして。傍觀するを例とす。さてかく宣言するときは。  
 その臣民に命じて。一方に向ひて。これを助くるをゆるさず。又  
 戰に用ふべき器械彈藥の類。一切これを供給するを禁ず。これ實に  
 的當の道理なれば。萬國。みなこの義を遵守す。  
 されば我國と清國と。宣戰の事ありしより。まづ英國は八月七日も  
 て。局外中立を宣布す。その大意は吾幸にして。諸國の帝王と和親

を保ち。その平和を維持せむと。力を盡しに。今不幸にして。支那皇帝と日本皇帝と戦を開かれたり。しかるに。吾はもと兩國の帝王と。その臣民とに。好みを結びし事久しければ。いづれにも。従ひがたし。よて。戦の終るまでは。かたぐ。嚴正の中立を守るべしとて。別にその臣民に守るべき條例七條をのせられたりき。大抵その臣民等がみだりに。許可をまたず。一方に加擔すべからずといふに在り。もしこれに従がはざるものは。刑罰に處せらるべしといふ。尤も公平なる法令といふべし。これについで。葡萄牙國和蘭國伊太利國瑞典國威國合衆國獨逸國地利匈牙利の國々。いづれもこれに同じ。佛。露の兩國ついで。局外中立の意を示せり。

されば豐島の海戦にて。英國の高陞號に賊せられたる清兵を撃ち沈めたれども。かの船は清國の爲にやどはれたるゆへをもて。その事。すべて清國にかゝりて。我は敵國に向ひて戦ひしのみ。英國に關せず。

ず。こゝをもて。英國東洋艦隊の司令長官上海に海事裁判を開き。これを審理せしに。我海軍の所爲をもて當れりとして。その本國に告ぐるの大意は高陞號は英國の國旗をかゝげられたるにより。日本海軍これに向ひ。交際法をもて。これを處分せしに。船長もまた。これに應ず。されども清兵その命に従がはず。船長を脅かしこれを射撃するに至る。これ清兵この船を奪奪せしものなり。日本海軍已を得ず。遂にこれを轟沈せしは。かれが豪奪のうちに在り。されば。その處置正當なりとすとの趣なりき。

學術大に開けしより。武人軍士といへども。敢て兇暴の事をなさず。されば高陞號が清兵をのせ來りしとき。昔の武士ならましかば。敵船とみて。何かは猶豫すべき。從容の處分を盡すこと無く。無二無三に撃ちかくべし然るにさはあらで。戦鬪急遽の際にあたりて。少しもその禮儀法律を誤ること無きは。最も我帝國の光輝を海外にか

かやかして。後世に至るまで。禮儀の風をのこし留むべし。これに反して。清兵等みだりに船長を砲撃して。疎暴のそしりを免れず。この一舉小なれども。彼と我との優劣判然。

### 我國民の勇氣

牙山豊島の戦ひとたび我國民の耳朶に徹せしより。殆ど電氣の人に感ずるが如く。全國人民男女老少を問はず。一時に敵愾の心を生ずるを。殆ど一人の身の手足毛髮に於けるが如し。ことをもて軍費を献せんとて。まづ報國義會といふもの起れり。次に婦人恤兵會あり。その他或は酒或は菓子。艸鞋衣服に至るまで。我がとらじと。献せんと請ふ。又軍人等が出陣して。その妻子饑寒に逼るものあるときは。その住居の村町にては。軍人妻子撫恤會を起して。金を集めてこれに贈るもありけり。新聞社は。さらに義捐を募りて。これを献

せんと謀るもあり。ことに於て。官には別に恤兵部といふ局を設けて。それ等の献物を受く。門前市を爲し。晝夜の隙なく。送り來るもの山をなせり。市中は偃歌を唱へて。我軍の勝利を祝し。また國民の義氣を賛揚す。闕巷の小兒といへども遊戯に戦争の狀を學び。旗を作り。木劍を揮ひ。敵を追ふまねして。日をくらす。又義勇團を作りて。かの地にわたりて。力を盡さんと請ふものありて。處々に起る。政府その義勇を嘉みすといへども。常制あるをもて。ゆるさず。これが爲に。詔勅あり。その意は。各地の臣民等。忠貞國を愛するの至情はさる事ながら。國に常制あり。民に常業あり。非常徵發をのぞくの外。人民にのく。その常務を守り。もて内に産業を生殖し。富強の源を培養せよ。義勇兵の如は只今はその用なければ。その旨知悉せよとの王言なりき。我國民は所謂億兆唯一心といふべし。王言もまたいと辱くかしこき事なりけり。されば

臣民等は徐にその本職を守りて。いたづらに。狂奔せず。動くこと  
あらば。唯義によらんのみ。

威海衛を襲撃す

清國に最も堅牢にして。巨大なる軍艦あり。鎮遠定遠の如きは。各  
國にも開えたる堅艦なり。これをもて。我海軍ははやく之を誘き出  
して。粉砕にして。海上の覇權を奪ひ去かしてのち要衝を取るべし  
これ手足を剪りて。然るのち。心胸を刺すの計なり。もしさも無く  
て。徒らに彈丸を費して陸地の砲臺を轟撃するとも。彼を困弊せし  
むるに足らずと。此我海軍の計較なりとさく。彼を困弊せし  
清國の首府北京順天府の海上の最第一の要害はこれ。いづこぞ。盛  
京省の旅順口と山東省の威海衛ならずや。この兩要地は海口に相對  
して渤海を扼す。砲臺屹然として。鯨波に臨み。島嶼前に擁し。山

岳後に峙つ。萬艦も容易に擊碎すべく。千砲もたやすく一砲をも崩  
缺すべからず。殊に。威海は。獨逸人漢納根が築く所にして。堅牢  
第一をもて稱せらる。

清國の北洋艦隊の軍艦は提督丁汝昌が指揮する所にして。かの總督  
李鴻章が。海外無雙として。誇る所なり。しかるに。一たび豊島の  
戦の爲に。その操江を降され。濟遠をやぶられてより。膽落ち氣挫  
けやしけん。數日を経れども。その首を出し得ず。海波靜かにして。  
涼風天に滿るのみ。閑然として音も無し。

我海軍の諸將はすでに。かの軍艦を盡く擊破せんとせしかど。彼出  
でざれば。いかにともせんすべなし。されば。その碇泊する所を突  
きて。微塵にすべしと。八月十日の曉海上いまだ烟霧深く殘月は朦  
朧として。雲間に漂ふ。我軍艦大小凡そ二十艘二隊となして。かし  
こに向へり。さるほどに。船は威海衛と大連灣との間に至りて。ま



づ一船をやりて。港内の軍艦の有無を伺はしむるに。果して敵艦十隻あり。港口には。水雷を沈めて。襲撃に備へたり。されど。日本艦隊が。俄に寄するとは夢にも知らず。寂として。眠るに似たりと報ず。我謀成りぬと喜び。艦隊令を下し。電燈を滅し。輪聲を止め。しづくど進みゆき。海底に張りたる電線をきりたちく。はや軍港に近き。灣内に至るほどに。いつのほどにか。今まで在りし十隻の軍艦かげだに見えずなりけり。尋ねるに。此夜我軍艦の威海に向ふとき。いづれの國の軍艦にやありけん。二隻ありて。我艦隊の前後にいそぎすのみゆきけり。されば。かの敵の艦が影を失ひしは。かの軍艦がいつのほどにか。しらせしにやといふものあり。斯くて。我艦隊はこゝを去りて。渤海灣の南に至らんとて。長山島と。芝罘の間をすぐるほどに。忽ち一艦あり。我かたはらを通ぎ。禮砲一發を放ちたり。凡そ海軍の法に。夜間は砲を發せず。しかる

に。何のゆへにかこの事あり。その聲遠く。波をやぶりて。残夜の夢を醒しけん。この地の海岸の砲臺これに驚きて。早く電燈を高く放ちて。海面を照らすに。我艦魏然として。見えしかば。砲臺より隙間も無く。發砲す。我は程よくこれに應じて。砲を發し。なほ進みて。海峡を通ぎ。灣内をみるに。敵の艦隊六隻あり。すは。敵こそわれ。のがすまじと。波を蹴立て進むほどに。敵はすでに。錨を抜きて。山海の關のかたに逃れ去れり。我艦隊の半隊は。なほ海峡の外に在り。されば。萬一敵の計略に陥らんも測りがたしとて。長追せずして。引きかへせり。敵はこれを見て。長山島と芝罘の間に水雷をしきて。これを撃沈せんと謀りしかど。我艦隊は。その機を察し。疾駛して。のり過ぎしかば。さばかり危険の海峡も。事ゆへなく。東方やうやく白みゆく。曉雲の間にきらめく星の影をみて徐に歸途につきしとす。こゝに敵の巡洋艦一隻長島の沖に泛べてあり

けるが。我艦隊に向ひて。砲を發す。我艦は忽ちこれを一二發にして追退け。また長島の砲臺に向ひて。暫らく轟撃して。その壁壘を打破りしかど。もとよりこれを取るの計策にあらざれば。そのまゝにして過ぎしどなん。

一來。一去。これを迎ふものなく。これを追ふものなし。何ぞ。清人の怯懦なるや機を視て發し。勢に乗じて起つ。何ぞ吾海軍の諸將のよく。進退するや。

彼我の仁暴

宣戰の詔下りしより。すでに。清國をもて。同盟の國とせず。かれば。その國人の我國に在るもの。もし我國の法律に従ひ。我國の命令を用ひざるものは。盡くかの國に追かへざるべきものなり。されども。我國の仁惠なる。厚く。かの人々に命じて。その居を安くせ

しめ。その生活を奪ふとなし。これは。かの國の政府の處分にこそ。罪はわれ。その人民何の咎かわらん。我に向ひて。好意を盡し。仇せざらむものは。我もまた。同じ人民として。これを待遇せらるべしとの意をもて。これ等に諭示さる。さるを。我國の領事官が。かの天津を去るにのぞみ。その官吏兵士等に虐待せられしをきくに。その無禮不遜いふばかりなし。その政令の下に及ばず。上下の壅滯せるをかくの如し。もて彼我の風俗人情仁暴の異なるを知るべきなり。普佛の戦開かれしとき。普國は。我國の清人を待遇せしが如く。佛の人民普都に住するものをして。安堵せしめしに。佛國はかへりて然らず。佛の都にありし普人一千四百戸盡く佛人の爲に逐出されて。やうくのがれかへるを得しとありと。その頃の書に見えたり。仁者は興り不仁者は亡ぶといひけん。かの仁義禮樂を口にする支那人にして。かゝる僻事あり。周孔をして今にあらしめむには。いか

に肩をこそ。聖めんずらめ。

中和の斥候

牙山豊島の戦に。勝利を得たれども。これ等はいまだ一小戦にして。いまだ彼我の得失をいふに足らずと。我海陸の諸將は。ますく進みて。直に北京を衝き。彼の膽を奪ふにあらざれば。止まじと。出軍の議に暇なし。清國は牙山の報を得ざる前に多くの兵を出して。平壤に屯せり。それより。次第に大同江をわたり。京城に攻めさせんと。計較あれども。例の緩慢なる風俗なればや。唯おもてに聲言するのみ。いまだ。進んで。内地に入らんとせせず。我もまた。かの情態をくはしくせざれば。容易に進むべからずとて。遂に斥候を出すの要ありて。忽ち衝突に及びしは。勢の然らしむるところなりき。

初我斥候の騎兵は七月の下旬より。はや北の方にすまみゆき。大同江の邊にふるむく。この向の岸は即ち平壤府にて。清軍すでに。ここに屯營するものあり。騎兵等は。かくどしり。敵の多く來らざるに先ちて。劫に江をわたり。郵便電信局を毀ちて。その通路を斷むと謀り。八月一日の夜。おのく川にのぞみて。渡を求むれども。舟一隻をも見ず。かしてこゝを走りめぐりしに。わづかに。漁舟を得たりければ。これにのりて。北のさしに至らんとせしかど。煙深くしてわたりがたし。翌日は空しくすぎて。第三日に至りて。わたらんとせしに。こ度はかの舟を見ず。いでうち渡らんと。水にのぞめども。折ふし霖雨つときて。洶流岸をうち。容易に入るべくもあらねば。いづれも思ひすて。かへりしを。陸軍を曹川崎伊勢雄ひとりといまひて。戎衣をぬぎ。劔を腰にし。忽ち水中におどり入り。荒浪を物ともせず。向の岸にわたりしが。敵ははや。これを知

りにけん。城中より。雨の如くに射出す小銃にあたるべくもあらざれば。岸に繋ぎし敵の舟に飛び入て。こなたの岸にかへり来れり。斯くて九日また斥候は中和にありて。露營を結び。宿せしに。通事走り来りて。馬糧を求むと。このあたりの。民家におもひきしに。清兵この北の方二里まで来り。夜に乗じて。我を襲はんとすとき。用心あるべしと告ぐ。まをしからず思ども。今夜といへば。油断ならむといふにぞ。げにもと。斥候隊は。露營を出て。林のうちに馬を立て。更に二名の騎兵をつかはして。これを伺はしむ。この時。我斥候隊は。歩兵中尉町口熊樵。騎兵少尉竹内英勇及び。軍曹河崎と騎士等を併せて八騎に過ぎず。さればこの町口は。これより先に衣服を變じて。平壤に入り。かしこの形勢を探り。こゝに至り。又竹内は斥候として風山黃州を徘徊し。すでにしてこゝには来りしなり。この夜は敵の襲ひきたるをみず。この明る日の午後四時朱染亭

より。敵兵襲ひきたるもの四五十人馬上に銃を放ちて隙間もなく進みたり。町口等は。小勢なれども。敵とみて。いかでためらふべき。れのく。銃を發ちて戦ふほどに。敵は容易にすゝむと能はず。やともすれば。退かんとする体なりしに。忽ち援兵二百餘騎砂烟をあげてすゝみ来れり。多勢に無勢敵しかたければ。退引かんとするほどに。又うしろの方より伏兵起り。前後より挟み撃つ。中尉は屈せず。なほも。勢をはげまし。竹内どもに。劍を揮て縦横に奮撃せしが。忽ち竹内は敵の丸に中りて馬より落つ。中尉は馬を飛ばし道を轉じて。田圃の間に出づ。軍曹遙にこれを見て。そこは遠し。こなたへと。大道を指し示せしに。心得たりと。一鞭あてて大道に出たるに。敵ははや近きたり。今は逃るゝ所なしと。馬のかしらを引返し。銃を投げすて。劍を抜き斬てかゝりしに。又敵丸にあたりて。馬より落て死したりけり。河崎もまた。血路を開きて逃れ出しに。

彈丸飛來りて。その馬の腹を貫き屏風を倒すが如く伏しかば。その時一足を馬腹に敷かれて。起つと能はず。敵は得たりと走りちかづき。あはや一突に刺されんとせしを。伏しながら。小銃を獲ちて。これをささへしに。敵はいさゝか色めきたり。こゝろど。跳り起て。足を引抜き。劔を揮て入りしに。忽ち敵中退軍の喇叭起り敵はそのまゝ退きしかば。怪有にして。微傷も負はず。路傍に立たる少尉の馬を得てこれにうち乗り。葱秀驛にかへり。少佐一戸にありし次第を報告せり。この役中尉町口。少尉竹内等通辨人二人騎兵三人合して七人死して。その餘の二人は生擒にせられしが。平壤にて。無残にも斬殺されしといへり。この役は一小戦にして。録するほどの事にもあらずといふもあらん。豈然らんや。大軍とともに進むはやすく。寡兵をもて敵地に入るは難し。難を犯し。死を致す。誰かこれを勇とせざらん。誰かこれを傷まざらんや。

車駕親征

かけまくも畏き。吾仲哀天皇は。熊襲を征伐せんと筑紫に御幸なりし。のち。神功皇后三韓を伐たせ給はんと。かの地に渡海せさせ給ひしを。始め世々のみかど。親ら六軍を率ゐて異邦追討の軍陣にのぐませ給ふと。その例多し。齊明天皇朝倉の宮に遷りまし。またこれにつぎて。天智天皇かの地におはしまして。海表の軍政を督し給ふも。嘉例とや申べき。

吾皇は天智の帝の英武を繼させ給ふにぞ。中興の政は申もさるなり。海外の國々に。交を厚くし。禮を盡し。武をもて。海陸の軍を盛にし文をもて。人民を撫育し給ふ程に。靡き奉らぬ草木も無く。海波静にして。富岳動きなかりしかど。一たび清國の無禮を責めて。巴を待させ給はず。戦を開かせ給ひしより。日夜叙慮を勞せさせ

給ひ。我みづから軍旅に臨みて。諸軍と艱苦をともにすべしとの。大御心にや。遂に東京を出まして。安藝の國まで御幸なるべきよしを。仰せ出されたりけり。

九月の十三日車駕皇城を發し。新橋の停車場に向はせらる。天日高

く照し。清風起り。曉雲吹き拂はれて。蒼々として爽やかなり。陪

從の百官百司禁軍執事群を成し。列を整へ御車の前後左右を警護し

奉り。奉送の人民もまた。街衢に處狹きまで立列びて。これを拜み

奉る。歡呼萬歳の聲洋々としていと勇まし。鹵簿儀仗のさまは。く

だくしければ。これを略す此日は尾張の名古屋に。やどらせ給へ

り。次の日名古屋を出まして。西京にしほし慰はせ給ひて。その日

は神戸に脚を止む。明る日又瀛車にめして。次の日十五日廣島に着

せさせ給ひ。第五師團司令部をもて行宮とす。即ち征清の大本營是

なり。日に文武の諸大臣を御前に召して。軍議をさこしめさる。供

奉に從ひ奉るものは。有栖川親王總理大臣伊藤博文陸軍大臣大山巖

海軍大臣西郷從道。宮内大臣土方久元を始めにて。文武の諸僚數を

盡して。行在に伺候す。かくて。廣島鎮臺師團長野津道貫はこゝを

發して。朝鮮に入り。進て平壤におもひき。陸軍大將山縣有朋は九

月四日をもて。東京を發し。十二日朝鮮の仁川に着す。これ諸軍を

總統して大功を奏せんが爲たるべし。戦ふ毎に勝たずといふ

諸君みずや。豊臣太閤不世出の英雄にして。戦ふ毎に勝たずといふ

事なく。遂に朝鮮に兵を出す。その雄圖は。なみくの豪傑の上に

あり。しかれども。その朝鮮役に。大將を選抜して。これに大柄を

委ぬる事を知らず。かの庸碌の孫子浮田秀家の如きものをして。大

事に任せしむ。その策劈頭すでに誤れり。こゝをもて。諸將功を争

ひかの。自ら隊を成し。合同の力をかく。今吾皇上人を知り

て能く任じさせ給ふからに。海陸協同し上下一心この一事すでに前

人に。立まさらせ給ふと違し。ましてや。萬乗の重を顧みず。みづから行營にのみみて。軍事を議し諸將を調遣せさせ給ふに於てをや。

北進軍

清國は牙山の兵破れしを。憤り。平壤に兵を出して。我に向て一大戰を試むとす。我いかにず。徒らに。その来るを待んや。時を移さず。これを攻破るべしとて。八月八日我混成旅團は少佐一戸某兵を率ゐて。龍山を發す。是より先。少佐京城の後備たり。いまだ。清兵と一戰を交へず。頗る不平の色ありしが。この令をきとて。喜躍して。自ら禁ずるを能はず。傍人にかたりて。やうやくにして。飯櫃吾前に來れり。少佐が發するの前。朝鮮政府は使を平壤に發し沿道の人民に我國の兵は汝に仇するものに非ず。朝鮮國の爲に。清兵を掃攘するものなり。よりて。その望むまゝに。糧食人馬を給す

べしといはせけり。されども。朝鮮の邊陲は。いまだ我日本の義舉をしらず。唯清國の命に従ふをもて。是とするもの多ければ。やゝもすれば。我兵を仇視して。行軍甚だ便ならず。先鋒軍は高陽。坡州を過ぎ。臨津江をわたり。長湍府を過ぎて。開城府に至る。こゝは。高麗の時の。舊都にして。人烟頗る稠密なり。山岳四方に聳へて。要害殊によし。十三日開城を發し金川に向ふ。時に斥候騎兵來りて。我騎兵が朱染亭にて。清兵の爲に殺されしをさく。さらに進みて。十七日南川店に至る。朝鮮の使臣李用漢は。かねて我軍に先立ち。行軍の爲に。人馬糧食を供給せしに。開城より北に及び。人民使臣の命に服せず。李用漢いかにともするを能はず。事に托してかへらんとす。我將士これをゆるさず。電信を發して。これを政府に告ぐ。政府嚴く用漢に諭す所ありしかど。堪へずやありけん。遂にのがれ去れり。電信の技手も逃れて。信線もまた斷れ

たり。十九日葱秀里に達す。敵兵平壤の城を堅守し。大同江の險によりて。我兵を防がんとし。時々兵を出して。江をわたりて。南進せんとするの意を示す。是に於て。先鋒軍俄に退て金川に至り。廿二日。また退て。開城にかへる。此時第二獲の一隊西島中佐これを率ゐて至りしが。暫く兵を此に屯して。後軍を待つ。蓋敵を誘き出して。これを撃んとする計略なるべし。

廿七日旅團長大島義昌後軍を率ゐて。開城府に至り。途上霖雨の爲に遮られ軍行速ならず。九月四日瑞興府に着す。府使を洪鐘淵といふ。さきに。上書して。時務を論じ。極めて日本の信ず可らざるを論ぜしほどなれば。我將帥に向ひ。表に敬意を示せども。陰に不平を懷き。我參謀長が。説諭をきき強辨して。食料人馬の命に應ぜず。參謀己を得ず。衣冠を褫ひ。これを縛し。朝鮮政府に飛報して。これを罪せんとを求め。さらにその懷中を探たるに。清將等と交通

するの状を得たり。終に械を施して獄に投ず。しかれども。鐘淵少しも慄るゝ色なし。將士等反て。その膽氣を稱し朝鮮人にありては。頗る俊傑なるべしといへり。

さて。一戸少佐は。旅團長に先ちて。開城府を獲しければ。この月の六日黄州に至り。城外を過ぎ。一小隊の兵柳陰に憩て。朝食を食せしをりから。清兵二十騎ばかりこゝに至り。我兵をみて。大に驚き。城のかたに逃れ去る。我隊追駈て。その一騎を斃す。敵兵は城の銃眼より。我兵を目がけて一齊に小銃を放つ。我兵は。これに應じて戦ひ。さらに。一隊をもて。河をわたり。城門に迫り。吶喊して。その門を推しやぶりしかば。その兵皆走る。かゝる所に少佐の全軍到着せしに。城の第二門に入り。兵馬節度使の營に入り。發砲せし鮮兵六名を縛し。黄州城をとる。この黄州の節度使は李容觀といふものなり。黄海一道の兵馬を領し。頗る威權あり。閔氏の



爲に擧られて。この任に在り。清兵平壤に至りしより。これが爲に兵食夫馬を供して。無二の事大驚なりしが。我兵こゝに至りて。始て志を變じ款をふくれり。然れどもその志信ず可らざるをもて。長岡參謀をもて我國の義舉を告しらせ。我兵北に進むと。一日なれば。朝鮮の獨立一日の早きを得るなり。されば御身はその國の爲に。我に向て好意を示し。我軍行に便利を與えよと。利害得失を審にして説きければ。容觀一讎にも及はず。唯々として命を奉し。過を悔ひ。非を改むるよしを述べけり。こゝに於て。韓兵の我に向ひて。砲を發せしを責め。その武器を封じ。庫中に藏する金銀米穀を出し人馬を供給する等の事を命じ。ならびに。平壤に在る所の將士の數を問ふに。容觀答て。それがしが。さく所をもてすれば。清將は衛汝貴馬玉昆。左寶貴及び豐。葉。依。の六將にして。その兵二三萬人に及べし。なほ吳大猷袁世凱の二將勇兵を率ゐて本月十六日には到着

すべしと承りて候と答へけり。そのうち。野津師團長がこの地に至りしとき。再び洪鍾淵を呼び出して。糾問せしに。既に外務衙門の移牒により。我兵の害意なきを知り。大に先非を悔ひたるよしを。陳謝に及びしかば。師團長は。なほ審に訛傳を諭して。これをゆるし。府使の任を盡し候へといひしかば。然すがの鐘淵も。その寛大の處分に服せしとす。かくて九月十日野津師團長は。黃州に進み。大島旅團長は中和に留り。第二團体は。鳳山に進み。朔寧支隊三登縣にとまり。各平壤進撃の用意に暇無りけり。我北進の軍これを大分すれば。京城より平壤に向ふものど。元山より。直に平壤に西下するものど。二者に過ぎざれども。京城よりすゝみしものは。開城府より。さらに全軍を三分して。各その向ふ所を部署せるをもて。これを元山よりするものど。合すれば四方面の進軍となるべし。部署すでに定り謀略すでに熟せり。駭天驚地の

一舉はや眼前に近きたり。小西攝津守行長地下に壘あらば。汝の爲に恥を雪ぐべき時來れり。雲に駕し。龍馬に跨りて。この快戦を一覽せよや。

平壤の大戦

平壤もと百濟王の都せし所にして。古昔の史傳に。その名著はれ。隋唐の時。すでに金城鐵壁の要害と聞えたり。幾百歳の星霜を経て。陵谷の變遷あれども。この城はなほ依然として昔の如し。殊に。文祿の役小西行長が。李如松の兵と戦ひし牡丹臺はなほ今日に在り。城中にて。無比の堅壘と稱せらる。頗る防禦の力を著はしたり。かの牡丹臺は。大同の流に臨みて。崢嶸として。高く聳へ。清軍の精銳多くここに聚れり。この前面堡壘の後に假城を造り。これに胡虜普の野砲三門を備へ。前面には。雅士命格連發砲あり。此外小銃

數百をもて。之を防禦す。皆連發銃を用ふ。この臺の壁は急斜面にして。高さ五丈餘あり。その造築蓋し數十日を費せしと見ゆ。又六の砲壘ありて。要衝によりて野砲各一門を設く。本城の正面は。大同江の南岸に四個の砲壘を築く。これを船橋里の壘と稱す。いづれも。堅固なれども。殊に第三壘は城に近く外に溝を穿ち。壁の高八迷度堤上は鋸形の波線を爲し。その周圍に土穴を造り。そのうちより發射すべし。

西北には。ナイソンと稱する砲臺ありて。城壁の外に在り。皆堅固の堤壁にして。防禦の備極めて嚴なり。成歡の敗將葉志超は前度の恥を雪がんと。江を渡りて。南岸の壘に據り。直隸馬歩兵總兵左寶貴は城北の壁を守り。豐某彞士成の兩將は盛字軍を率ゐ。馬玉昆は葉とともに。左岸に陣し。衛汝貴は馬歩軍を指揮して。南方の城外に屯す。その他徐揚等の諸將は。城内に

ありと覺しく。赤地に白く將帥の名をしるせる旗城上に翻々たり。すべて清兵は虚聲を張りて。敵を驚さんと罪營を多く張り。また旗幟を夥く立つれども。その實は必ず旗のもとには。大兵を置くを無し。さて。我平壤攻撃の兵は四道より進め。さらに一枝隊を師團の本隊より派出す。元山の軍は。十三日松橋に着し。十四日順安に出で。十五日直に平壤に向ふ。朔寧軍は十三日大同江に沿ふて。麥田洞に止り。十四日大地境洞に進み。十五日平壤に向ふ。師團の軍は。二隊となりて。一は月峯山下の綠沙浦をわたり。一は水津浦をわたり。江西縣に至り。左側隊を出し。甌山縣路より左右ならびて平壤に向ふ。混成旅團軍は。諸隊よりも。はやく十二日大同江の南二里水灣橋に來り。敵の力をこゝに聚めて。背側の兩面の攻撃に便りせんとす。斯くて。旅團長大島義昌は。その兵を分ちて。左右中の三隊と

し。右翼は西島中佐。左翼は奥山少佐中央は武田中佐をもて司令官とし。豫備隊は一戸少佐輜重隊は島崎大尉をその長とす。その身は豫備隊の前頭にありて。諸隊を指揮す。この外騎兵隊あり。獨立隊あり。これを游撃として。諸隊の運動の便宜を助く。左翼は羊角島より江をわたりて。進むべく。右翼は船橋里の東に向ひ。中央隊は船橋里の前面に向はしむ。十三十四兩日の戦は。さしたるをなし。中秋の殘月はなほ。銅鏡の如く。明らかなる。大同江に浮べて。曉方の風清く十五日午前四時はやほのく。と明ゆくほどに。中央隊は船橋里の田畝をすまみ。敵の第一壘に近けり。午前四時二十分を報ず。撃てどの號令ととも。まづ右翼隊より。發射を始む。中央隊は。その側面より均く撃ちて。第一第二壘を破らんとす。敵はこれに應じ。砲撃するに。江を隔て北岸なる大同門の西壘よりは。遙に野戦砲をもて。はげしく我兵に向て砲射す。天はいまだ全く明け

ズ。驟らたる煙の江水を掩ふに。硝煙は。こなたの船橋より湧き  
 起れり。砲聲轟々と響き。砲口より出る煙は紅舌を吐くが如く。敵  
 の戦砲直線に火を發し。我榴散弾は空に迸りて。花を散す。鐵片火  
 雨瞬間も止むことなく。凡そ廿餘分間は砲聲斷ゆるひまなく續きた  
 り。  
 はや四十分となりぬ。忽ち進撃の喇叭起れり。右翼隊は一大呐喊を  
 もて。怒濤の堤防を崩すが如く。敵壘にせまる。敵はこれを防ぐと  
 いへども。我猛勢にわたりがたく。頽れ立て。壘を棄て。第三壘を  
 指して逃れ入りぬ。はや第一壘は我物となれり。中央隊は。この時  
 側面より均く。進み。第一第二壘の間に向ひて。砲射す。敵は。大  
 砲の速射をもて。我を撃つと。しきりなれども。我山砲は地の身さ  
 をもて。効を見ると多らず。  
 我右翼すでに第一壘を乗取りしかば。その廿一聯隊第一大隊の第一

二中隊は。さらに壘を越へて。第三壘を取らんとし。中央隊は。森  
 少佐三四の中隊を率ゐ。側面より。突進し。第二壘によりて。三壘  
 を取らんとす。第三壘は。前にもいひし如く。堅固に築きし砲壘な  
 れば。第二壘より頗る高く。これより攻めんとするは。容易の事に  
 わらず。されど。中隊長町田大尉は少も懼れず。衆に挺で十四名の  
 卒を率ゐ。第一壘を跳り越へ。第三壘をどらんと。第二壘まで至り  
 しに。敵は連發銃をもて。拳下りに。撃ちければ。二壘に至らんと  
 して。すでに三彈を身に受けた。痛手にたまらず。はたと地上に  
 倒れしかど。すゝめくと呼はりながら。息絶たり。つゞきて。森  
 少佐は部下の中隊を率ゐて。奮進して。傷を負ひぬ。中隊長林大尉  
 これをみて。身を挺で。敵にせまりしに。忽飛くる彈に中りて。  
 倒れたれども。なほ屈せず。起んとしせに。創重ければ。起る能は  
 ず。士卒は三たび。これを救はんと。大尉の側に立よりたれども。

敵弾又も飛來りて。三人どもに傷を負ひぬ。大尉の屍を収るによしなく。翌日これをみれば。その首をさりととり去らる。斯りければ。無念にも退きけり。

この戦の初りしとき。朔寧軍は。敵壘に近きたり。元山軍ははや。北漢山のうへより。大砲をもて。敵壘を亂射す。こゝをもて敵はまた他を顧みるに暇なく。我軍のせまるを知らざるものに似たり。立

見少將尙文は斯くどみて。直にその兵を進め。敵の第三壘に向て。砲射せしむ。敵はこれに應じ。第一第二壘より。十三連發銃をもて。

側面の射撃を爲す。勢猛雨の如く殆ど當る可らず。少將こゝに於て。兵を分かちて。二とし一隊は山口少佐をして。敵の右翼に當り。一隊は富田少佐をして。これに當らしむ。又かゝるふに。牡丹臺は此地の要處にして。その地高く。堅固し。これ我兵の途を塞ぐものなり。急に撃てこれを破るべしと。副官桂大尉をして。中隊長小倉大尉。

本間中尉を指揮して。第一壘に突き入らんとす。敵は臉を恃みて。出でず。我兵進てすでに敵の銃口と相接せんとす。堪らへずして。出で戦ふ。丸に中りて仆るゝあり。槍に刺れて伏すもあり。或は叫び。或は逃る。こゝに死すもの五十餘人我軍第一壘を乗り取たり。この激戦に桂は股に傷つき。小倉。本間いづれも。劍を負はざるもの無し。是より先に。砲兵第一隊は敵と相距ると。八百メートルの丘上に砲を列し。頻りに榴弾を發し唯今第三壘に向てはげしく戦ふ

たる富田少佐を助けしかば。この彈忽ち敵の頭上に落かたりて。勢さながら。震雷の如し。然すが必死となりて防禦したる清兵も激と崩れて逃んとす。すは。この機が。ぬかすな。進めと。きつて入り。

難なく。第三壘を奪取りける。

元山支隊は十三日清兵の斥候を順安縣に破り。敵の兵站部にて。士官一名兵卒二名を生擒し。十四日は平壤を去ると一里にして宿し。

十五日北漢山に山砲をのぼせ。左方に歩兵を出し凡千五百迷突を距て、敵の左翼の堡壘を砲撃せり。時に午前五時又第十八聯隊第一大隊は敵壘を去る千迷突にて。義州路よりすゝみ。敵壘に逼まり。哨喊の聲どゞもに。一齊に砲を發し。忽ち左翼の壘を攻めどり。つゞきて。第一第二第五の敵もわづかに戦を交ゆるのみにて。我物どなり。第三第四は戦かはずして。潰走す。ことに於て。この方面の餘す所は唯牡丹臺の假城あるのみ。いで踏み破らんと。山口少佐を牡丹臺に向はしめ。高田少佐を。城後の方池に進む。元山支隊長佐藤大佐は。第二第三大隊を督し。第五堡壘の背後より。狹路を経て。城後に出で三面より。城内を攻撃す。されども。牡丹臺の敵兵は。壘壁堅固のみならず。その器械も銳利なればや。いまだ奮戦して。容易に落ちず是より先我砲兵第一中隊及び元山隊の砲兵は北方の城壁を打ち破らんとしけれども。歩兵の戦急なるをみて。直にその砲

口を轉じ。山口少佐の一隊を助け。牡丹臺に向ひ。砲撃せり。果せるかな。臺上の敵兵雨の如くなる榴弾に支ふるを能はず。勢やうやく衰へて。たちらふ所をそのがすなど。立見少將兵を上げましたしはげまし三面ひとしく奮進して。遂に牡丹臺をどりてけり。この時臺下なる一重門たやすく破りかたかりしを。我兵のうち一卒あり。忽ち壁を攀ぢのぼり。門をうちより啓さしかば。衆軍これに入るを得たり。人その勇を稱しける。佐藤大佐は牡丹臺の陥るをみて。進んで玄武門を破らんとす。この門は牡丹臺の眼下に在り。且泥土をもつて。堅く固めれば。容易にやぶれずやうやくにして。打破るものから。敵の彈丸雨の如く。進むべくもあらず。よりてしばらく。歩兵の進むをどゞめ。砲兵に命じてこれを撃しむ。城門半破れて。四柱のみ中空に聳へたり。ことに至りて。午後二時しばらく兵を休めたり。

さても野津中將の一軍は十四日に。新興洞に着し。明る十五日午前六時に至り。山川洞の前に出たり。敵は直に城南の西隅に在る高處より。砲を發ち。我兵を攻撃す。我は小高き岡に大砲を列し。歩兵は。黍畑のうちに在りて。これに應戦す。中將は。幕僚を岡のうへに立て。敵状を察せしに。忽ち轟然として。一發の砲中將の頭上を飛び過ぎて。遙のうしろに落たりければ。かたへの人をかへりみて。敵の彈丸も恐るゝに足らずと。一笑せり。斯くて。戦ふと一時半ばかりなれど。朝霧いまだ全く晴れず。敵兵は一出一没勝敗容易に決せざりしに。やゝありて。烟霧散じて。日光あらはれしに。忽ち見る。敵は一隊の騎兵をもて。川を渡し。我隊に向ひて。一齊に進み来る。馬蹄の音轟然として。地に響きぬ。我一中隊は唯今敵の陣する高地の方に向ひたる二十二聯隊の一中隊は。直にうしろをかへりみ。うての一隊とにも。鏝と放ちし連發に。忽ち數十騎をうち落

せり。のこる騎兵はこれにも懼れず。なほも進んで馳せ来るを。あだかもよし。十二隊の一中隊が進軍の令をうけて。聯隊旗をまもり。すこみゆきしが。ふもはずこれと行きあひたり。復も一齊の發砲にまた數騎を仆されたり。されどもこのころものは。屈する色なく。又進んで來りしに。山の小蔭に馬を立たる我騎兵は此れをみて。ちつども遲疑せず。馬を駈て走りより。十八騎をのこりなく。馬上にこれを刺してろしけり。敵の騎兵はこれのみならず。又一隊の馬軍あり。蹄を鳴らして。飛びきたるに。又我兵の爲に響ちおどさる。凡そ前後四度なりけれども。遂に突撃の策行はれず。終に城中に引入りけり。かくて日はすでに暮れぬ。

この日の午前三時に至るまで。船橋里の戦いまだ勝敗を決せず。又大島少將の左翼の兵は。羊角島より江をわたりて。奮戦しけるに。民屋の放火の爲に直ちに進むとを得ず。かゝる處に天俄に掻き陰り。

沛然として。大雨降れり。雷鳴轟然として。空中に起り烟霧天に満ち。山河城廓は。忽ち迷暗のうちに没す。少將は諸手に下知し。暫く休軍の命を下しぬ。敵は命活たる心地やしけん。これも砲發をやめて。城中にげ入りたり。

立見少將の向ひし玄武門の敵兵は衛汝貴が守り居たる城の南方堡壘の午後三時頃に奥山少佐の手に攻陥られて。火を民屋に放ちたるをみて。大に驚き今は守り難しと思ひけん。四時三十分に。白旗を門上に掲げて。降服の意を示したり。少將は斯と見て。一隊の兵を率ゐ。玄武門より進み入り。城廓につきて。江に沿ひ。左の方の一小門の處に至る。こゝに城兵出て迎へ。降伏の意を述べ。言語互に通ぜざれば。桂副官出て。筆談す。敵はいふ。今此の如く。大雨にて。人数を點檢し。降伏の用意にくるしむ。乞ふ明朝をまてとあり。さらば門を開きて。我兵を納れよといへども。従はず。彼此の議論に

時をうつすほどに。清兵は壁上に群がり來りて。狙撃せんも測りがたく。地形頗るよろしからず。よつて少將は退て牡丹臺に至る。桂副官は。あどにのこりて。清兵どなは應接せしが。事ゆかず。遂に明朝を約し去る。しかるに。此夜清人ははやくも脱走の用意して。午後八時の頃より次第に群を爲し。城を越へ。牆をくわり。我先にどのがれ去る。我少將はすでに敵の降旗は緩兵の謀なるを知りしかば。少しも油断せず。一面には元山旅團に使を馳せ。一面には敵の走路に我兵を伏して待しめたり。これより先に。佐藤大佐も二中隊を順安に駐めて。あらかじめ。その走るを待ちぬたりしなど。ちつともぬかり無りけり。されば。師團の兵に向ひて馳突せしは。即ちこれよりやま前にて。その騎兵は奉天府の馬軍なれば。日頃精鍊をもて開えしものどぞ。されど。その効無りしかば。謀を代ていつはりて降旗をば立たるなりけり。



大島少將は十五日の戦に。飛丸風を剪て飛び來り。胸部を擦り側に立たる通辨人に中りて忽ちはたど倒れたり。少將の創は幸にして淺手なれば。物どもせず。大雨の起りしとき。暫く攻口を退けて。再び進まんと評議せしに。午後七時朔寧支隊より敵は降旗をあげたりと告げければ。さらば進めど。隊伍を整へ。船橋里の諸壘をみるに。いつのほどにか。敵兵は退きて。一人をみず。我兵は船橋を打渡るに處々にきり絶ちたる處あるを。飛越へ跳ね越て。城門に進み入る。三道の大軍齊くあげたる帝國萬歳の聲は山岳を崩すが如し。野津師團長は。すでに奉天の騎兵を追かへしけるが。その後敵はかそれて。出で來らず。十五日の日は暮れにけり。明朝は午前二時に乗取るべし。どの號令ありて。しばしまどろむ間に。忽砲聲起ぬ。敵の一隊は。城中より。圍をやぶりて馳出たり。時はこれ午前一時なり。かねてより。斯くあるべしと期したる事なれば。來る敵を待

うけて。忽ちこれを撃ち退く。かくするを十餘度。二時にして。我軍盡く結束し。大同江の支流をわたり。舌池門近くよせけるとき。敵は逃れ出んど。門を開きて馳せ來るに。はし無く出であひ。咄と叫びて。打ち散し門を破り。西大門より平壤に入りぬ。戦は終りぬ。日章旗は城上に赫々として光を放ちたり。我軍は正面軍の戦もつども烈しかりければ。死するもの多く。次は朔寧元山の手なり。新興洞に向ひし手は。死傷最少し總して。我將校の死せしもの八人。士卒を合して。百五十餘人。傷くもの五百餘人。清兵は總兵官左寶貴を始め。死するもの千二百餘人。傷くもの三千餘人にして。我軍に生擒せられしもの九百三十八人なり。この日師團本部より派遣せる掃除隊は。戰場を照檢して。彼我の死屍を求めたるが。二十一日に至りて。義州本道の路の邊に。綺羅やかなる衣を着たる五十餘の清人重創に苦みて。臥し。その傍に従者

と覺しき。負傷者あり。痛を忍びこれを見守し居たるをみる。よてその傍に落ち散りたる。書冊をとりてかへり。翌日こゝにゆきしに。傷者は盡く死し居たり。斯て。その書を検みするに。提督葉志超へ賞賜三萬兩の文字あり。又葉の妻及び女子か父夫に贈る尺牘あり。その他軍事によりて。建議せる書案軍隊配布の圖も。このうちに見ゆ。よて。清兵にその衣服を示すに。これ必ず貴人ならんといふ。これ恐くは。葉志超なるべしといへり。嗚呼志超牙山にやぶれて。その敗を蔽ひ不時の恩賞を受く。今又平壤に敗れたり。何の面目ありて。汝の君を看む。その死すでに晩しといふべし。城中に在りし將帥は士超の外に。馬玉昆。豐陞阿のみならず。湖北の提督吳鳳柱。貴州の提督羅學連もありしといへり。いまだ信否をしらず。これを要するに。全權を掌握して。軍の進退を敏捷にし。もて南進するに能はず。その主とするところは。朝鮮の京城に入りて我兵を追ひ拂

はんとするなるに。反て平壤にこもりて。防禦の策に出たるは。主客を顛倒せしものなり。これ將多くして事權一ならざるによるなるべし。此役に最も苦戦したるは。旅團長大島少將の手なりき。これは初めより。城兵をこゝに牽制し。力を一處に聚め。背側兩面の軍をもて。その不意に出んと計りしなり。されば。正面軍は必ず奮闘せずとも唯敵をして意をこゝに注がしむべしといふものあり。豈然らんや。もし正面軍戦をつとめず。徒らに牽制せんとするとも。敵は我日本人が奮勇決死の性質を知れり。しかるを。緩慢して。進まざれば。必ず疑ふ心を生じ。その背面を防がんとするの意を起すべし。少將は蓋しこれを知れり。故に死傷を厭はず。一時に奮撃せしをもて。敵は日本此手より攻め入らんと。全力を此に注ぐものなりと。誤り認めて。これを防ぎしなり。こゝに於て。背側面の敵は我兵の至る

を。かばかり早しとは思ひもかけず。忽ちに敗績して。遂に降旗を  
 牡丹臺の玄武門に掲たるにわらずや。之を要するに。諸將の  
 その方面の職を盡して。毫釐も差入所なし。これこの戦功あるゆへ  
 なり。これをかの清國人が攻守の戦略を顛倒して。大敗を招きしに  
 比すれば。實に天壤の相違あり。又文祿の役諸將心を一にせずして。  
 小西行長が功を諱み。一たび得たる平壤を忽ち棄てて退きしを思ふ  
 ときは。ますく。我諸將の賢を知るに足る。これ即ち我皇帝陛下  
 下の盛徳洪運の致す所也。輔翼大臣の力にわらずといふ可らず。伏  
 て庶幾はますく。輔弼の任を盡し。干城の力を厚くし。もてこの大  
 業を成就せんを。  
 こゝに讀者に向て大聲して。告ぐる事あり。そをいかにといふに。  
 兵は勇なるを貴み。器械は精利なるを先とす。しかれども。兵に最  
 も大なる關係は糧食なり。こゝをもて。兵站部をふきて。糧食を聚

むるをもて兵の最要事とす。吾嘗て。北支那戦争記をよむに。兵の  
 至るに先だちて。兵站部の吏員等。土地通用の貨幣を夥く用意して。  
 その地に入り。米穀獸畜。その他食用に供すべきもの一切を買収し。  
 蓄積するをもて職とす。その勞殆ど戰場に向ひて敵と死生を争ふよ  
 りも難とす。かの記中これをしるすと。極めて精密にして。且繁雜  
 なり。吾これをみて。大いに恠み。古人いふ。糧に敵によると。苟  
 も兵士勇にして。器械銳利ならしめんに。至るところ。食糧ある  
 べしと。思はざりき。兵食は戦争の最要にて。百事これより生し。  
 功を爲すと。敗をとるとは。いづれも。これによらざるはなきを。  
 されば。この度の戦にも。兵站部の得失大に利害に關係せり。韓人  
 事の是非を知らず。我を仇として。これを忌み。夫馬を役せんとす  
 れば。先を争ふて逃れ。穀粟家畜を求むれば。つねにこれを隠蔽す。  
 こゝをもて。我國より送り來れる。兵食山の如く龍山の營に積むと

いへども。これを前路に運搬するを能はず。平山以北は。食すべきの米無く。唯はづかに。黍粟を得て食ふのみ。ましてこれに副ふべき菜は。一もあるとなし。將帥士卒上下食を同ふす。もし黍粟盡くるときは。馱牛を屠りて食すべしといふに及べり。鳳山に至りて。はじめて二日の糧食を得たりといふ。食の乏しき事ここに至るこれ師團長が。初めて平壤を得たるとき。發したる電報に。我兵は食糧の大困難にも拘らずとはしるされたるなり。されば。此平壤の大戦の最も。苦なりしは。糧食に在りしを決して忘るべからず。吾ここに於て。北支那戦争記の作者がここに注意したるの。慧眼に服せり。平壤の大勝のち。わづか一日を隔て。ここに盛京洋の大孤山海戦の捷報あり。陸に海に我日本の光輝は大陽とともに。照らさるる所なし。滿清の妖雲この光に射られて。消滅するときは來れり。

### 大孤山の海戦

大孤山洋は。清國盛京省の海洋島の北東廿三里餘の處に在り。海岸を距ること甚近し。されども。海水洪湧として深く。烟波天を衝き。その勢頗る險なり。さて。我海軍は清國の威海衛を襲ひて。海戦を求めしかど。彼は我威を怯れて出であはず。ことをもて。久しく海上の消息をさかさりしかど。その偵察は少しも惰らず。海軍聯合艦隊司令長官伊東祐亨は九月十四日第二游撃軍と。八重山艦を仁川に留め。其他の諸艦を引率し。明る十五日大同江に至り。第三游撃軍と水雷艇磐城天城を鐵島にすゝめ。もて陸軍平壤攻撃の應援を爲さしめ。十六日伊東長官は松島に駕し。本隊千代田嚴島橋立比叡扶桑及第一游撃隊吉野高千穂秋津洲浪速後備として。赤城西京凡そ十二隻の軍艦をもて。十六日大同江を發す。こは敵の軍艦が平壤を

援はんとて。出来るを途中に遮りどいめんを謀りしなり。斯て。我が艦隊巡航の先鋒は第一游撃軍にて。吉野艦なり。午前十一時。のころに至り。東北島にわたりて。烟見ゆ。これ敵艦の來れるなりと。旗艦信號を擧て諸隊に報ず。そは敵こそわんなれ。日頃求めし我獲物逃すべからずと。諸隊どもに。はやく午餐を傳へ。用意を十分に爲し艦隊を整へて進みしが。敵艦は十四隻にして。定遠鎮遠經遠來遠致遠靖遠濟遠平遠超勇揚威威遠廣甲なり。時辰は零二十三分を報ぜり。旗艦松島は遊撃艦の信號を傳へて迎へ撃てと命を發す。四十五分に至り敵艦我と相距るを四千迷突。はやく。轟然として彼より發砲を始めたり。我艦ははまだ遠きをもて。取て發せず。やゝ三千迷突に至り。一齊に轟發す。彼は左舷より發し。我は右舷より發す。しばし戦ふほどに彼我兩隊一文字に相對す。彼は我より多きを二隻。殊に定遠鎮遠は無雙の堅艦と稱せらる。そ

の勢猛烈にして。疾雷起り。驚濤騰る。我艦もまたこれに應じ。すこしも弛まず。ちつとも騒がず。列を正し。律を守り。進退令に従ひ。回旋法に準ず。烟湧き。彈飛び。龍怒り。虎嘯く。我撃出す。砲丸は着々彼に命中し。揚威號は力竭きて。白旗を掲げたれども。時及ばず。我打出せる彈丸に忽ちに沈没し。それと同く。濟遠平遠も撞折れ。板破れて。兵士が叫喚の聲どもに沈没す。敵はこゝに於て。隊列亂れて逃れ去んとするを。我隊は列を爲して。その走路を遮りなほ勵しく戦ひしが。敵艦いづれも必死となりて。撃出す。巨砲はその力最強く。奮進したる我赤城艦の將台を目かけて撃かけたり。艦長少佐坂本八郎太は砲手を勵まし。聲を肯立。號令するはどに。忽ち飛來る三十珊半の巨彈雷の如く。我甲板を打碎き。餘勢迸りて。艦長の下半身を粉塵せり。その上半身は彈片どもに。高く飛んで。海中にざんぶと落つ。水兵はこれを見て。艦長の屍を敵

に得さすなど。もとより水練に習れたるものどもなれば。飛び入ら  
ず。引揚げたり。比叡艦はもと速力の遅ければや。進退諸艦に及ば  
ず。敵艦の爲に火を發したれば。南方に向て列を出づ。この時松島  
艦は長官が駕したる船又西京丸は。軍令部長樺山資紀が駕したる  
ければ。その將旗は檣上に燦然たるにぞ。敵の彈丸は雨の如くに。  
將旗に向ひ飛來たり。ここに松島艦分隊長大尉志摩清直は速射砲  
をもて。しきりに敵艦を激射せしが。一回轉の際しばらく暇ありけ  
れば。甲板にて烟艸くゆらしめたりしに。正面に向ふとひとしく。  
又颯々戦となり。鎮遠の大彈丸忽ち松島の砲臺の真中にどうと中る。  
何かはもつてたまるべき。さしも厚き。鐵板をもて作りたる。臺は  
微塵に碎け。清直は粉塵にせられ。一番分隊の少尉伊東滿嘉記も同  
じ枕にその身は骸もどおめず。失にけり。されども長官伊藤中將は  
泰然として。その信號を少しも變ぜず。ますく進て戦ふたり。西

京丸もと戦艦にはあらざりしを。近頃製造を改めて。艦隊に入りし  
かど。もとより最堅牢の物に非ず。されど樺山中將は例の剛毅無雙  
の性なれば。進で諸艦に従ひ。忽ち超勇號を一發の下に打ち沈む。  
かゝる處に。我赤城比叡が。定遠致遠の爲に追れんとするをみて。  
第一游撃軍は。左に廻轉し。西京丸と本隊は。右に向ひ敵艦を挟み  
撃んとす。時は是れ一時四十分敵の三十瑠半の大彈西京丸の機關室  
を貫く。されどもすこしも屈せず。なほも勵く戦ひしに。又彼定遠  
が發したる三十瑠半の砲彈墮つて。士官室を破り。舵機に通ずる蒸  
氣罐を碎きたり。ここに於て。我艦に故障ありとの信號を揚げて。  
秋津と浪速の間を過ぎて。敵艦の側に出でたるに。こは有名なる敵  
の鎮遠定遠なり。避んとすれば。速力及はず。進てこれを突に若か  
ず。それ遣れど。中將は甲板上に突立上り。聲振しぼりて呼はりた  
れば。心得たりと。必死を究め。猛然として。進んだり。敵の二艦

はその勇烈に怯れやしけん。忽ち艦體を開展しそのまゝ道を與えしかば。得たりと突進するに。敵は水雷艇をもて船首の發射管より水雷を發せしに中らず。又一水雷を發せしに。我艦の近く進みしが爲に。反て船底を潜り抜けて。逃あなたにて發しければ。西京丸は二度の危險にあひしかど。幸にして恙なく。敵艦平遠廣丙を撃ち退け。列外に馳出たり。この時のありさまは。島津義弘が關ヶ原の戰に敵中を突貫して出たるを學びしにやど。後に人これを評せり。さるはどに。敵艦の定遠鎮遠を取逃さじと追逼りしに。定遠は我砲の爲に火を發し。火焰を負て逃げ走る。忽ち見る。來遠號が隙をみて逃んとするを。我吉野艦これを追ふて。その前路を遮り。つゞけて放つ砲彈に火藥庫に中りけん。轟然として火起り。艦尾より燃初め見る。艦首に延焼す。艦はすでに舵を失ひ。同じ處に旋回し。後部水に入るとそのまゝ。前部は直立して。半空に向ひ。忽ち海底深く

沈みけり。こゝに於て。定遠來遠鎮遠は燒かれて沈み。致遠靖遠揚威超勇は皆盡く打ち沈めらる。帝國萬歳の聲は。遠く海上に響きて。我軍全く勝利を獲たり。なほも。逃る敵艦をのがさじと。追ければ。日すでに暮れて。海面くらく。敵が水雷を設けて尾撃に備んも。測りがたければ。我艦も天明廟島に至りて。敵艦をみざりしに。どの地位に引かへせり。此海戰に死せしもの將校軍醫十一人赤城艦長少佐坂本八郎太。橋立の分隊長大尉高橋義篤。松島の分隊長大尉志摩清直。橋立の砲術長大尉瀬之口覺四郎。秋津洲の分隊長永田廉平。比叡軍醫長三宅貞造。同主計長石塚鑄太。松島の分隊長士官少尉伊東滿嘉記。吉野の分隊長士官少尉淺尾重行。比叡少軍醫村越千代吉なり。清艦の死傷は。その數あげて數ふべからず。北洋水師提督丁汝昌副督獨逸人漢納根も。死せしども。或は傷を負へども。死に至らずと

もいへり。その信否はしりがたし。定遠の艦長劉步蟾。來遠の邱寶仁。經遠の林永升。致遠の鄧世昌。揚威の林履中。超勇の黃建勳等。その死生は。審ならねども。軍敗れて。その主將獨完かるべき理なれば。大方は戦死せしなるべし。讀者に向ひて。こゝろ付く可き事あり。凡そ戦闘を録する記事は。彼我各その功を著はさんとして。己が敗を諱み。その勝ちたる事のみを人に知らさんとを望むがゆへに。彼我ともに。實を失ふ事少なからず。漢土の南北朝の時。宇文泰高歡の岢山の戦は。我邦の甲越二家の。河中島ともいふ可き。兩雄の戦なれども。魏書周書ともに。己の勝をのみしるして。いつれか眞に敗れ。眞に勝ちしを。今に至るまで詳にせず。又宋の韓世忠金の兀朮と黃天蕩に戦ひしは。實に當時まれなる大戦なれども。これも前と同じく。金史宋史各その勝をのみしるして。敗をいはず。續通鑑及び後世の略史多くは宋史に

よりて。しるすがゆへに。韓世忠をいたく褒めもて。兀朮の功をのせず。皆一邊にのみ私して。公道を欠きたるものなり。されば。此度の平壤大孤山の戦を録するに當りて。こゝに注意せざる可らず。されど。我通信の記者は内外の事に達し。決して自ら私に記事を誤るものに非ず。況や戦場にありて。これを目撃し。これを公報に載するものをや。我報の誤無きはいふまでもあらねども。これを局外に立て傍観するもの。又我に敵たる支那人がしるしるものを。参考して。事實を訂すも。また時勢を知るの一端なれば。こゝに。外國の新聞と。支那新報とを併せのせもて。今日この觀を爲すものあるを知らしむ。支那新聞に勝倭餘話と題して。のせたるは。中國海軍諸艦大東溝外に於て。倭船を攻撃し。十八日正午より。戦を開き。其夜八時に至り。倭船四艘を撃沈す。倭均しく。力竭き。船傷きて。遁る。我軍



濟遠經遠の兩鐵艦に中りて沈む。此外各兵船及び水雷船四艘翌日を以て。旅順口に駛回せり。丁禹亭尙書(汝昌)受傷の説ありと雖も。傷勢甚微なり。敷くに刀圭をもつてせば。即ち妨碍なし。我軍の勝仗もつて。信を徵するに足れり。陸軍の如き。稍疎虞ありといへども。大局に於て毫も損ずる所なし。此より倭奴魂消し膽落ち。決して。汪洋渤海の中に恣横せざるべしとなり。

海軍の勝敗は彼我どもに。その地を去るをもて。いかにも。言くろめて。己が勝の如くに装へども。陸戦にいたりては。平壤を奪はれたるを。いかに驚を烏といひなすものも。いひ争はんやうもなければ。大局に於ては損ずる所なしといふこそ。おかしけれ。これによりて。おせば海戦の大敗は自然と知られて。反て己が兵士等が奮戦せしとまで。讀むものに。疑を抱かしむるものなり。

又海軍の大勝と題して。烟臺(芝罘)訪事西人の電報に曰く。北洋海軍

定遠鎮遠濟遠來遠靖遠平遠廣甲廣丙及び水雷艇四隻合計十二艘十九日早晨をもて。旅順に安着し云ふ。北洋提督丁禹廷軍門。副提督獨人漢納根。北洋海軍鐵甲鋼皮水雷艇どもに十六艘をもつて。運兵船新濟鎮東等六艘を保護し。陸兵六千餘人を載せて。鴨綠江に抵らんとし。十八日午刻甫めて鴨綠江に達す。江口一に大東溝と名づく。其附近の大鹿島より突然倭の兵艦十九艘及び。水雷艇數隻現出し。我師を攻めて。その路を阻去す。兩軍門高く旗號を上げ。各船をして豫備せしむ。既にして。兩軍戦を交へ。海水群り飛び。陣雲墨の如し。午より酉に至る。凡そ六時間倭軍船隻我に比し多き十艘に達すといへども。我軍の爲め。遂に鐵甲船四隻を轟沈せられ。餘船風を望んで逃遁したり。我師總戎(世昌)管駕する所の致遠及び。林君永升管する所の經遠皆鋼皮快船たり。而も均しく彈に中りて沈没し。又林王兩君の管駕せる揚威。超勇も同じく。鋼皮快船なるが船面を

焚燬せられ。急に淺瀬を覓めて去り。沈没をまぬがれたり。倭軍逃遁の後。我陸軍保護の爲に岸にのぼる。敢て追襲するものなし。丁未兩軍門稍微傷を受しも。甚大得ならず。下午獨逸領事館に電報達したり。その事相同じ。又海軍中に在りし某人の報知に據るに。倭兵大鐵甲船一艘として。我大砲彈に中らざるなく。死傷七八百人に下らず。倭奴自ら海面敵なしと誇るも。此役倭船我より多きと。十艘而も。長技をみず。得失相當るといへども。終に逃遁を免がれず。知らず此後倭奴尙大言人を欺くやいなやとあり。餘話には。沈没せるを濟遠經遠といひ。これには致遠經遠といふ。その言同じからず。ふもふに。三艦ともに沈没せしなり。その外焼かれて。うせしもの沈みしもあるは。我報にみえしに。これを諱みて。存せるやうにしるせるは。例の妄言なり。このもちに。我軍艦はまづ去りて。清艦おとにのこり。その陸兵を保護して。

岸に登せしとあるは。妄言のうち。最も甚しき妄言にて。陸兵を登岸せしは。戦の前に在り。戦後の敗艦いかにす。保護の暇わらんや。

在芝罘チアイナガゼット新聞の通信員は。九月十七日海洋島附近の海戦を左の如く報道せり。清國の軍艦は。この月十五日太沽を開戦せしは云ふまでもなく。日本軍艦と海戦を試んが爲なり。清國の艦隊は。定遠。鎮遠。來遠。平遠。致遠。經遠。超勇。揚威等十四隻より成りて。別に水雷艇六隻を率ゐたり。この艦隊の黄海に出んとするや。偶々運送船五隻は兵士をのせて。鴨綠江に至らんとするにあひしかば。進んで護送の任に當り。各戦艦に數多の兵士を搭載したり。而して北洋艦隊提督丁汝昌は漢納根及び他の外國人軍事顧問に隨伴せられて。旗艦に乗りくみ。又芝罘威海の間にて著名なる外國人十名許は。他の戦艦に分載したるが。運送船の士官及び機關

士は悉く歐米人なりし。然るに運送船は十六日の夜より十七日の朝  
 かけ。首尾よく。兵士を上陸せしめたるをもて。直に歸航の途に就  
 きたり。然れども。日本運送船もまた。清軍運送船の兵士を上陸し  
 たる地の附近に。日兵を上陸せしめたるものによ。日本軍艦十一隻  
 は。鴨綠江に向ひ。進航し來りて。端なくも。運送船に尾して。一  
 小島に廻航したる。清國軍艦に會したり。此時兩國の軍艦は互に砲  
 發し。四五哩の距離に於て。戦列を作りて。砲戦を交ふるや。黒烟  
 は海面を蔽ふて。各自敵艦の所在を見る能はざるに至れり。然れど  
 も。日本軍艦は落付拂ふて。敵艦目掛けて。速射砲を放ち。且つそ  
 の速力の迅速なるを利用し。巧みにその戦艦を運行したれば。清艦  
 は日艦に接近せんとせず。只管遠距離に在て。砲丸を發射したり。  
 清艦は日艦の中。その孰か何艦なるを見分る能はず。只司令官旗を  
 揚ぐるは。松島艦。速力の迅速にして。屢清國甲鐵艦に近きたるは

吉野艦。構造の一種特別なるは浪速艦なるべし。これに發砲  
 たるのみ。清兵の奮戦したるは。疑を容れざるも。戦中清艦の  
 規矩に違ふて戦ふは。日本兵の敵手は非ず。恐るべき爆裂の聲  
 は。耳を劈くばかりに響き。火焔は高く空中に飛揚し。膽を寒から  
 しめたり。然れども。その砲聲間斷なきが爲めに。如何なる効驗を  
 奏したるかを。見る能はざりしも。清國軍艦は日本軍艦の二哩以内  
 に近く能はざるに。日本軍艦は實に驚くべき熟練を以て。戦艦を運  
 行し。次第に清艦を戦地以外に撃退したり。清兵は乗組外國人には  
 げまされたるも。最早戦ふ勇なく。無暗に發砲して。一つも命中せ  
 ざるに。日本軍艦より發つ砲丸は。清艦に中らざるはなかりし。定  
 遠は火を吐き出したるも。幸にして。火を鎮め。戦地以外に出で。  
 鎮遠も日艦の彈丸に撃たれて。丁汝昌及漢納根(その一手一足を失ひ  
 しとの説あり)負傷し士官水兵多く死傷したり。乗組み外國人二名

は戦没し。敵名は負傷したるも。予はいまだ何人か戦没したるかを  
 確定するを能はず。巡邏艦二隻も。日艦の彈丸に撃れて。火を失し  
 たるも。甲鐵艦が敗壞せられたるが如く。甚しからず。致遠も亦彈  
 丸の爲に轟沈せられ。來遠。超勇は揚威の沈没せんとするを援けつ  
 るありし時。亦轟沈せられたり。揚威の艦長は戦地を免れて。淺瀬  
 に乗り上げたり。此は怯懦の所爲なるも。同號が火を失したるを見  
 れば。怒して可なり。やがて。午後六時に垂んとせしや。砲聲の次  
 第に衰へたるは。雙方彈藥を盡したるが爲ならんか。黄昏に至り砲  
 聲は全く止みて。日清兩國の戦艦はそれく戦地を引上げたり予は  
 日本戦艦の戦後の運動につき。通信すべきともなきも。清國軍艦は。  
 十八日に於て威海衛に歸航し。一として船体を破壊せられざるはな  
 かりし。清國軍艦は十三隻にして。その噸數は三萬六千三百五十噸  
 なるに。日本軍艦は十一隻にして。その噸數は三萬六千七百噸なれ

ば。雙方の噸數は略同一なれども。日本艦隊の作戦計策は。遙に清  
 國艦隊にまさり。且日本艦隊及び游撃隊は。清艦隊を乗りまはして。  
 その走路を絶ち。終に此大捷を得たりとあり。  
 これ所謂局外の傍觀なれば。その叙事頗る公平にして。一邊に私  
 するの文なし。但前文に清艦を戦地以外に撃退せりといひて。の  
 ちには。兩國の戦艦はそれく。戦地を引上げたりとあり。前後  
 矛盾す。おもふに。前の説は事實なるべし。のちの文は。清人の  
 氣を損せざらんが爲に。周旋の文字ならんか。結末の句に日本軍  
 艦は清艦をのりまはして。その走路を絶つ。しかくとあれば。  
 その勝敗は分明なり。よく讀み味はひて。この通信者の意を知る  
 べし。

戦死の將校

豊島の海戦には、吾將校水兵に戦死負傷のものなし。牙山平壤大孤山には頗多し。いづれも勇烈義慨なる。平日の素養なかりせば、いかで事にのぞみて、この勇あらんや。されば、その朋友親戚につきて。平素の行状をきと。同時戰場にたちて。力を悉せし人々に尋ね問はど。必ず後の通鑑ともすべき事實に多かるべし。されど、いまだその暇無ければ。しばらく新報に散見するものに就きて。かりにこれを録す。漏ると人必多かるべし。他日廣く搜りあつめて。その勇勳烈義を掲揚すべし。

松崎大尉

安城渡の戦に死せし。松崎大尉名は直臣。熊本の藩士にして。歩兵第二十一聯隊に屬し。正七位勳五等たり。西南の役に少尉試補をもて。各地に轉戦し功によりて。勳位を賜ふ。次第にのぼりて。大尉

となり。今の勳を賜はれり。大尉人となり。沈毅にして。行義篤く。漢學に通じ。詩文を善くせり。平生虚飾を好まず。居室を美にせず。衣服を麗くせず。質朴にして。武勇を好む。在韓中兄直正にかくりし手翰をみるに。かの地の風俗人情をしるして。簡にして盡せり。もてその心を用ふるの細やかなるを知るべし。その西南の役に死せし友を吊する詩のうち。身斃三彈丸揚美名。欲招魂魄築佳城。如今憶起硝烟處。耳底猶存叱咤聲。又喊聲入涉客魂驚。追憶當時轉切情。今日祭庭告亡者。爲君安置一佳城。あゝ當時友を吊するの作。今はその友が君を吊するの詩となり。とは。

大尉の戦死。諸新聞の報ずる所に據れば。兩軍對戦の時とす。よりて本文には。之によりてしるす。しかるに。民友社徳富蘇峯は同じ郷里の人にて。その遺族を問ひしとき。聞しといふは。少し異なる所あり。大尉かの時副官及び通辨人と隊伍に先ち。村落に

入りて。とある茅屋に老翁一人ありしをみて。こゝに清兵埋伏せしものならん。いづれに在りやと問ふ。老翁知らず顔してさらに見候はずといふ。大尉剣を抜てこれを叱せし聲のしたより。忽ちこの屋の側なる家のうちより。清兵あらはれ出で。一齊に銃を放ちしが。大尉と副官に中れり大尉は二弾を受けども屈せず。あな脱りたり口惜。といひて斃れたり。通辨人は匍匐して民家に傍ひのがれ歸りて。かくと語れりといふ。凡そ戦時急速の間の瑣事は。人々傳聞を異にす。殉節の實事はいづれにしても何の害かあらん。細かに同異を訂すも益無し。

坂本少佐

大孤山洋の海戦に死せし赤城艦長坂本少佐。名は八郎太。鹿兒島の八なり。西南の役に。海軍少尉に任ぜられ。筑波艦に駕し。功をも

て。勳六等を賜ふ。次第にのぼりて明治二十三年少佐となり。露國公使館附の武官となり。かの地に駐在す。二十七年四月歸朝し。赤城艦長に任ぜらる。少佐天性沈毅にして。事に處する機敏の才あり。平生衣服少し汚垢づくときは。これを服せず。他に出るとき。必ず清潔の衣を用ふ。しかれども。衣服を飾るの意無し。資性潔癖によるものなるべし。戦に赴くとき。絶て家人に告ぐる言なし。ほど經て。書の來るあり。唯いふ。征清の事功を終るの日。軍費の多きをもて。或は軍人といへども。俸給を減ぜらるゝ事あるべし。今よりその心して。家人等絹布を服するを勿れ。すべて綿服を用ひよ。あるものは。盡くこれを賣れど。家人書信の次に。軍刀一振のこし置き給ひしが。贈りまゐらす可きやといひ送りしに。とよめ置きて。盗人をさるの料にせよと答へしとす。常に家人をいましめ。食物によく意をどよめよ。歐洲人の堪忍の力あるは。平生滋養によさるもの

を。食すればなり。殊にゆく末永き兒童書生などは。よく心を用るよどいひけり。職にありて。公務を理するに。私事につきて。いかに火急の事なりども。一切これをかへりみず。その事を果し終るのちならでは。しらざるものと如くなり。已が乗駕の軍艦つねに掃除を潔し。一毫の塵だにどめず。常に海上にて拂拭せし船をみな人間ふどきは。しるもの答てあの艦は坂本が乗りかゝるわいと。この一事を見て。平生公事に心を用ゆるをしるべし。さてこそ。此海戦にも衆にぬき出て任をつくしたるなれ。さらば少佐の死は。自ら甘ずる所なり。自らゆるす所なり。嗚呼いさぎよきかな少佐。

志摩大尉

松島艦にて身を粉塵にせし志摩大尉は名を清直といふ。宮崎縣北諸方郡都城の人なり。はじめ海軍兵學校に入り。のち少尉となり。累

進して。大尉となる。性質温厚にして。人と争はず。されど一度心を決するときは。いかなる難事にあふといへども。少しも屈する事なし。今年運送船近江丸の船員となりて。朝鮮に往來す。一日人にかたりて。かゝる時に運送船にのりてあらんは。軍人の不幸なり。一死をもて。職を盡し。名をのちの世に。揚げんは今日にあらざして。またいつの日をか期すべき。あなうらやましき軍艦の人々よといひしが。七月に至りて。松島艦の分隊長となりしかば。その喜いふばかりなし。大尉砲術に長じ。百發百中の妙あり。されば。清艦と戦ふとき。大尉が照準して放ちし彈丸よく命中し。敵艦これが爲に死傷多しといへり。大尉平生交友を好み。人財に乏しときけば。囊中を空くして。これに與ふ。されば。友人は戯に大尉を呼びて。海軍中の貧乏士官といひなせり。されば。家に餘財なけれども。少年の學資乏きものをみれば。俸祿の入を舉て東脩食料の費とす。そ

の義侠かくの如し。大尉兩親なほすこやかなり。つねに孝養おこたらず。又二弟あり一を山路通信といふ。陸軍の中尉たり。一を志摩猛といふ。海軍少尉たり。又一子あり。清英といへり。戦地より消息を妻の育子にふくりて。軍人はいづれの日にか。身を失ふも測がたし。御身よく清英を養育して。我志をつぎ。海軍に従事して。國の爲に力を盡さしめよと。されば。その戦死の事聞ゆしとき。友人來りて。これを吊ひしに。父は今時は軍人の正月なり。軍人の死は花なり。清直はよき時に出わひて候といひ。母はまた。いと有難き御旗のもとに。戦死せしは。この上もなき本望に侍りと。又妻は海上に居るものは。生死は實に測がたしと。夫の常に申したればかくあらんと妻もかねて思ひてこそ侍れ。この度の戦死は。夫も心に足て候はめと。答へしとなん。あな雄をかし。あな賢し。

仁恩將校士卒に及ぶ 驕惰にして罰をかふむる。

海陸の捷報つゞきて廣島の大本營に達す。

征 皇上叙感斜ならず。勅使を軍中につかはされて。厚く功勞を賞せられ。物を賜ひ。且戦死負傷の者を慰吊し給ふ。諸將校下士卒に至るまで。感泣せざるものなし。陸軍大將山縣有朋中將野津道貫。海軍中將樺山資紀中將伊東祐亨等これに答奉るの言。皆功勞を諸將校に推し。毫も自ら誇るの色なく。その言。一口に出るが如し。そのうち。將校の戦地を經しものに。命じてその實況を奏せしむ。皇上親らこれを前に召し。聽かせらる。その勇戦の状を奏するときは。御喜面にわらはれさせ給ひ。又諸將校士卒の戦死負傷をさかせ給ふときは。哀痛の色見ゆさせ給ふ。御前に候する諸大臣も。此が爲に感泣せざるもの無しとぞ。昔後醍醐天皇新田左中將が使者を御前に召



して。鎌倉追討の勝仗をさこしめしよ。斯やあらんと申しおへり。嗚呼吾邦の勝仗は此の如し遠く清國の事をみよ。

かの八月十七日清國皇帝が。その大臣李鴻章を責むる言。かの國の新報に見ゆ。倭人朝鮮と露隙を生じ。干戈を用ふるに至り。其封疆を占領せり。朕屬邦の艱難を見るに忍びず。直に三軍を派して。大

清と屬邦との共同の敵を剿討せしむ。彼李鴻章は。身。直隸總督の大任に居り。已に一切の軍政を朕に委任せられたる者なり。此時に當り。只當に鞠躬盡瘁。事を幹して。敢て懈る所無るべし。然るに。

兵起りし以來。凡そ百の操縦やともすれば。機を失し。曠日彌久。も丕績の見るべき無し。是れ朕が明を傷ぶる最も甚しきものに非ずや。朕今李鴻章に向後三眼翠羽冠及び黃馬挂を用ふることを禁ず。

李鴻章たるもの。惶懼誠恐して。幸に倭人剿討の實を。後日に擧ぐるを得て。もて前日の罪過を償ふことを得べし。

これいまだ。平壤大孤山の太敗をさかざるの前になり。この頃さく。李鴻章盡く軍職の命ありて。なほ留任し。もて罪を償はしむ。あ

離か前日山海關にありて。氣。東洋をのむの人たるを知るものぞ

征清錄畢

奏凱餘唱

學海居士

聞朝鮮警報有此作

(一)	唱	餘	凱	奏
洞觀興亡迹	何不行勇斷	紛議猶未熄	如何迷去就	并欲謀吞蝕
俯仰思古今	弊政盡釐革	八道陰霧屯	紛錯生疑惑	日出好義俠
夜山殘月白	戰氛化祥鷲	京城妖雲塞	維時三伏日	自主共戮力
	涼雨施膏澤	禍胎萬人懼	炎熱融金石	扶弱非利土
	篝燈閱前史	危機一髮隔	土寇旣蕩平	補敗非伺隙
				辦髮取九州
				物久而朽腐
				上下紊厥德
				東海箕子國
				漢唐守遺俗

(二) 縹◆大瀛海。星羅紛萬國。強弱相牽制。武備兼文德。黠者乘厥虛。浸潤謀蠶蝕。誓約徒爲耳。所貴在兵力。韓土介魯清。虎視互窺隙。分黨小朝廷。君臣共惶惑。吾邦重信義。同盟等金石。使彼窺窬徒。漸次歸殄熄。小人縱讒間。言路輒壅塞。讜論疑毀謗。忠告見踈隔。若或一蹉跌。不免起兵革。巨艦蹴雲濤。旌旗盈山澤。土民荷擔立。恐迫文祿迹。庶幾安人心。曲直別皂白。

七月廿五日。吾秋津洲高千穗二艦。逢清軍艦。遠擄江廣乙三艦及運送船於韓海豐島。清艦發砲挑戰。吾艦迎擊。沈其運送船。溺二千五百人。降擄江走靖遠廣乙。偶讀國民新聞。有樹旭旗七言古詩。因用其韻。

黑雲一點蒼茫邊。

忽然巨艦凌青天。

海風簸盪黃龍泣。

太陽旗耀爭相前。

四艦圍繞互角。特衆殆類糜鼠◆。藏砲一聲鐵板碎。紅光破浪猛火爆。一艦沈沒雲濤摧。二艦半裂鳴狂雷。窮寇莫追回吾軍。特擒一艦凱歌來。咄滿韃子同嬰兒。地廣民衆將何爲。醇酒欲醉順天府。燦爛旭日輝大旗。

杉浦梅潭曰。開戰第一。二艦大捷捕獲。各國無比。爲吾海軍吐氣。快絕快絕。

景福宮

景福宮前妖氣黑。排闥欲盡使臣職。紅花碧竹志未成。大鵬一擊始展翼。韓王悔過除奸臣。鷄林自此風雲新。合從盟成堅於鐵。鎖關陳兵西絕秦。海風吹裂靈輿島。牙山草木歸一掃。鉄研磨得數斗墨。燕然勒銘欲屬稿。

杉浦梅潭曰。以前二公使爲陪襯。提起大鵬一擊筆力萬斤。

又曰。秦字押得甚妙。

(三)

(四)

牙山行

敵兵猶屯牙山壁。

我軍已及成歡驛。

安城伏兵一戰盡。

轟然巨礮飛霹靂。

硝煙暗淡戰五時。

清軍雖勇力不敵。

須臾山河砲聲止。

器械狼籍萬屍積。

戰勝結胃纒。

古人曾所云。

豐島昨日鑿纒牆。

牙山今日殲千軍。

日東

鍊鐵清如水。

萬馬蹴破燕山雲。

杉浦梅潭曰。豐島二句。照應起二句。得歌行句法可喜。

安城渡

砲聲轟伏兵起。

將軍奮勇激戰士。

辮髮奴豈足懼。

何不飛越一帶水。

叱咤而來

劍生風。一丸如電中其胸。

雖丸中胸氣益奮。

息已絕矣身不償。

嗚呼奈何淚汜

濫。恨君不見牙山陷。

杉浦梅潭曰。奇旨創造。名辭重出。若置李茶陵樂府中不能判之。

松大尉

死無益。

死何輕。

死破敵。

死猶生。

吾愛松大尉。

逢伏氣不屈。

一躍安城渡。

劍光飛電疾。

大尉死激三軍。

敵壘拔黯戰雲。

鴻毛泰山真男子。

嗚呼大尉不徒

死。

杉浦梅潭曰。錢牧齋評李茶陵樂府曰。長短豐約。除疾高下。隨所會爲之。僕

於此篇亦云。

信夫恕軒曰。好章法。自敢勸歌來。

又曰。大尉得此二句。可以瞑矣。

李老爺

(五)

(六)

日本國小豈我。猶捕飛蛾投烈火。

吾有練軍猛於虎。

多且不懼況么麼。

李耶袁耶好大言。

虛喝何能嚇殺人。

豐島牙山屢敗績。

飛報前後頻相聞。

掩耳盜鈴真愚豎。

慝敗裝勝何所補。

愆憤成病袁本初。

壅蔽欺君李林甫。

奏

杉浦梅渾曰。袁恃大國誇權力。小才漢耳。李不然見多年接白誓之跡。處事

凱

摸稜。能排國難。亦是一世姦雄。決非可侮敵也。

餘

信夫恕軒曰。結二句對仗收筆。何等妙案。

唱

滅耶滅謳五章

頃者閩巷有滅耶滅謳。詞素鄙俚。然頗帶敵愾之氣。乃翻作此曲。

支那之水軍何其懦。堅艦利礮畫葫蘆。紅墩一射黃龍死。二千五百歸天吳。防海

將士心膽裂。總兵降矣滅耶滅。

信夫恕軒曰。紅墩黃龍。不期而對。妙。

支那之陸兵何其懦。成歡牙山一戰屠。艸木變作山河血。膜拜求哀辦髮奴。巾幗免死棄旄節。將帥休矣滅耶滅。

奏

信夫恕軒曰。巾幗二字使用得妙。

凱

支那之文臣何其懦。慷慨氣節一人無。黃金如山誇豪富。不為國謀為身圖。宋明

餘

末路歸一轍。宰輔盡矣滅耶滅。

唱

信夫恕軒曰。是豈彼土文臣。我國文臣。亦無乃然耶。

又曰。盡矣二字。原於左氏來。

(七)

支那之武臣何其懦。平時相矜韓岳徒。事急萬金募無賴。兵營成群皆羸鷺。八旗百萬役何說。三貅疲矣滅耶滅。

(八) 信夫恕軒曰。平生矜於勇氣者。逢事必怯。所以有好畫龍之譏。

支那之人民何其懦。敗而不怒非丈夫。盍來試日本刀利。遼東平壤何。颯。雄心  
消磨氣挫折。國勢衰矣滅耶滅。

奏 信夫恕軒曰。彼避我實擊其虛之意乎。未可必輕也。

凱 又曰。五國威遇敘述。抗慨間暇。使世之文學博士等為滅耶滅矣。吁彼輩荷

餘 筆立朝。皆沈默先生而已。未開作一詩一文。徒索餐尸位。不知其家生無足

唱 子亦可辨焉。

杉浦梅潭曰。五章異趣同曲。自是一種聲調。非揚非李或類尤展成耶。

本田種竹曰。天才聯綴。音節壯厲。字句皆不涉深僻。專以明粲為主。此尤易

入人肝脾。

### 威海衛

威海鎮海森儼列燕山。門戶牢於鐵。日本艦自天來。萬◆怒濤蹴亂雪。獨恠敵  
艦一隻無。海天雲盡沙禽呼。一聲兩聲巨砲響。自此豈難衝太沽。雖然輕敵誇勝  
非長計。回帆且養三軍銳。不若千艦萬艦雲集時。待我長鯨飽吞噬。

凱 次向山黃村韻

餘 吾有筆一枝。鋒銳大如椽。奇文描山水。洋捲雲煙。新詩寫英雄。

唱 鬚眉乃宛然。近苦無題目。枯坐聳吟肩。今年炎威甚。茅廬火爐煎。

雞林風雲動。倏忽飛電傳。山震砲聲崩。海怒戰雲纏。上下氣激昂。

誰肯貪安便。我將揮吾筆。刻畫諸將賢。盲傳與腐史。不敢爭後先。

(九) 風生簡冊上。雲一硯池邊。庶使迂儒氣。奮揚一洗湔。

(〇一)

杉浦梅潭曰。海陸二戰。盡山震二句。風生二句。頗雖近自負之言。乃是實事。決非虛言。豪放氣老益壯。使讀者眩若于後。

九月十三日

奏

皇上移蹕廣島行營。遙督海表軍政。恭紀廿四韻

凱

疆域標天日。一靈萬國高。懷柔皇德盛。招撫毅思勞。遠客殊優遇。

餘

貴賓厚寵褒。三韓方弭伏。九土獨驕敖。若不禁覲覲。遂將縱發鑿。

唱

群論同意決。眾口一辭牢。將帥多謀畧。宰衡富俊豪。調停施砭石。

裁割試鸞刀。豐島初聞捷。牙山再告逃。頑冥何悔過。兇傑愈增叨。

義籍干戈力。勢湏征戰鑿。六軍降帝闕。八駿度官壕。曙色開金戟。

秋風動白旄。火輪飛電疾。鐵騎奮鷹鞞。翠嶂迎宸眇。丹霞映御袍。

奏

龍營臨港口。鳳輦駐林皋。田圃防擾害。人民戒驛騷。重權煩聖運。

凱

大柄仰親操。砲怒崩巖骨。血流漬野蒿。精兵殲巨虜。堅艦碎驚濤。

餘

勇進寧云苦。長驅莫少撓。遼東平若礪。燕北舉如毛。雅奏一回駕。

唱

凱歌賀建瓴。基千載固。明世喜相遭。

(一一)

信夫恕軒曰。開口先喝起天日。次以萬國趁勢。叙出眼光筆力并高。又曰。筆力堂々正々。如武侯始出岷山。梅潭翁忍甘受巾櫛。呵々。

生有焉。

得排此等文字

杉浦梅潭曰。詩格嚴正。色澤老蒼。蓋憲章杜律。脫王李套語。非萬鈞筆力。不

(二一) 又曰至尊英風鬚眉畢助筆力千鈞

過墨水百花園作 十三日

收錦一斑曉露叢。滿園草木入秋風。韓山未報好消息。想見壤城鮮血紅。

奏 信夫恕軒曰。遊履猶待轉報。志士仁人如斯耶

凱 此夕中秋也用去年韻

餘 水光滿地淨無煙。瑤闕珠宮在眼前。橫槊何人韓海上。戎衣寒照一輪圓。

唱 信夫恕軒曰。奇々儻々

捷報屢至。賦此志懷

擣虛出不意。兵法之所重。王帥一破敵。禹域大震動。率士起義憤。萬姓盡奮踊。何不棄此機。占領彼要港。吾聞臺灣島。澎湖接鷓籠。

沃壤物產富。煙雲見鴻洞。延平所根據。卅年兵馬擁。曾使辮髮徒。歛手久惴恐。樓船若一一。踏破鯨波洶。乃使少有備。如何敵義勇。取以為吾有。內地應驚悚。誇大縱如彼。必然出和講。國一壓東洋。朝聘爭接踵。蒼溟萬流歸。北辰眾星拱。

凱 杉浦梅潭曰立論出人意表。亦是一奇策。然前有大敵不遑顧後。恐是不免

餘 勝上議吾未首肯也

唱 又

(三一) 漢武討匈奴。大將遣衛青。唐憲征淮西。裴度統甲兵。士卒臂使指。迅疾若建二。發縱隨意旨。呼應爾乃靈。闔外不掣肘。大功始得成。不見文祿役。諸將互相爭。攻掠有勇奮。勝負無奇一。自從近事起。



(四一)

未出大將旗。雖云軍律重。委任莫乃輕。將相會眾傑。廟堂聚群英。  
誰哉舉一臂。蹶起蹴滄瀛。兵士皆一躍。旗幟忽精明。鬪艦飛電急。  
奔蹄轟雷驚。必見旭陽影。高耀北京城。

杉浦梅潭曰在韓將軍。忠勇威武。萬軍一和。雖不知文祿諸將等謀乖離若  
曠日彌久。或不保無此累。大將渡韓。號令歸一。豫設此策。服兄能知機也。

聞海陸大捷作

五十鐵騎度江來。平壤瞬間堅壘摧。應博藥家兒子笑。血痕狼籍牡丹臺。

信夫恕軒曰妙

練光亭下礮如雷。旗影森然映水開。只道敵攻自前面。不知背後忽飛來。

又曰所以不備不虞不可以行師也

羽書昨夜達宸聰。賀捷歡聲到處同。回首遼洋三萬里。焚天烈燄海雲紅。

又曰如視

破煙散處海天寬。如熨平波萬里間。十四黃龍旗影盡。紅曠高照大孤山。

奏

又曰何等氣魄

凱

又曰清高雄渾四首皆佳。而余取第一第三云。

餘

杉浦梅潭曰。四絕句。鋒鏖銳利。光怪陸離。譬諸古刀。非大和。非備前。一見吾

唱

知其為正宗一派

題石坡道人畫蘭

右朝鮮國太公李。應所畫懸崖蘭一幀。托根崖石。嫩葉倒垂。中着數花。瀟灑秀  
潤。無弩張態。亦佳作也。信夫恕軒曰。有花  
有香無限。怡致。公為今朝鮮王生父。然不得與政事。居

(五一)

(六一)

常憤懣。嘗煽動匡徒。欲退<sub>二</sub>后閔氏及其族。事不成。反<sub>一</sub>清將馬建忠所擒去。拘清國數年。乃得放還。其不平可知矣。想軒曰此蘭芽為牛羊所踏者蓋閔族猶吾王家有藤氏。世為外戚。掌握勢權。一族滿朝。賄賂公行。虐民蠹國。公意欲除之以張王室。其志豈不善。而固守舊習。敵視吾邦。事起倉卒。玉石混淆。是所以不能成也。不圖今茲土寇變起。吾使臣忠告以革弊。王始大悟。納其言。乃有七月廿五日之事。公振袂而起。白髮紛如。以七十之老人。奮當國難。從容揮霍。舊弊頓革。朝綱一振。亦何壯也。軒曰蘭始華四隣為香夫胸中有瀟灑脫落之餘地。然後可以成驚天動地之事業矣。不然臨變恐惶。處物狼狽。果成何事。公之畫蘭即公之胸襟也。想軒曰何等文致漢昭烈曰。芳蘭當門。不得不鋤。想軒曰愈出愈妙閔后公婦也。黜之廢之。孔聖以蘭為王者香。公奪政於閔族。歸之王。懸崖之根於是乎固矣。想軒曰應首句收筆完密可喜明治甲

午八月。是歲朝鮮開國五百三年也。

信夫想軒。日文香國香。優劣難判。

### 與西村天囚書

奏 天囚兄足下。僕嘗讀足下戲著。於東京。諧謔百出。奇語迭出。事多規諷。然猶謂是才人習氣。未足以槩其蘊蓄矣。數年西遊初見於浪華。席上多客。快談如雲。獨見足下議論卓絕。大異儕輩。嘗然奇之。曰嗚呼是人豈可以才人目之乎。信夫曰初目為才子居三年。有福島中佐遠征錄。載在朝日新聞。即足下所著也。叙事詳悉。條理秩然。間有一種英氣躍然於文字外。比之他新紙所載。漫<sub>一</sub>無統緒者。殆如霄與壤矣。嗚呼足下一奇士也。想軒曰次以為奇士近者朝鮮之變。足下首航海赴之。乃有遊韓日錄。尋有與韓官書二者。文辭勁健。理義痛快。使人奮然起敵之愾心。何壯也。

(七一)

(六一)

近時吾文士執翰墨遊彼土者幾人。果有勝於天囚其人乎。乃有之。其文章卓越。有過於此二書乎。僕頃讀韓人洪鍾淵李南珪疏。其所言陳腐迂濶。然有有氣槩過人

矣。彼輩咸謂。日本人一味詭譎。悍。視利不知義。尙武不解文。若得足下書

奏 讀之。必然而悔。愛我敬我者日本人。如彼清人。欲臣僕我婢妾我耳。然則足

凱 下二書。不唯文辭之美。理義之確。而其益於彼我交際大矣。嗚呼。足下豈唯一奇

餘 士。蓋當世策士也。恕軒曰。今則以爲策士。一層進一層。僕又嘗讀文祿朝鮮事。不過征復文書。及一

唱 二武人所記。其餘據懋忠錄隱峰野史明史。補綴成文耳。未見尋繹源委。詳盡顯

末。以爲信史之料者也。蓋豐公素不喜文事。而志在貪其土地財寶。不知義理爲

何物。加以諸將好勇爭功。無一人曉大勢大體者。是以寥寥無聞也。伏望足下益

聘耳目。詳形勢。記事詳悉。得失明白。以顯著諸將士功績於天下。兼使吾輩如

目擊其狀。而耳聞其聲矣。夫秦儀戰國之策士也。其言論見於書者。縱橫馳聘。操

縱如意。若著書以續百史之後。豈不使龍門之筆更增一段光彩耶。吾所以深期足

下也。何日得交臂呼酒。相與拔劍研地。宣此襟懷。時惟炎暑。伏庶爲國自重。軒恕

奏 曰。豐公客。秦儀客中客。假二事。以見主意。文法緻密。

凱 信夫恕軒曰。薪天囚以著已有志於脩史。命意極佳。讀者思到于此否也。

餘 記豐島戰

唱 清國使 其操江艦將王永發。護英國高陞船。載清兵一千百餘。將航朝鮮。報達牙

山。清艦濟遠廣乙二隻出迎。遭吾秋津吉野浪速三艦於豐島洋。時釁端未啓。吾

艦揚將旗示之禮也。清艦不應。俄開砲門挑戰。吾艦以其地多洲嶼。故避出洋面。

(六一) 清艦發砲擊之。三艦還戰。砲彈亂發。硝煙蔽。震震濤怒。戰過一時。濟遠不

(〇二) 能支。逃走直隸海。廣乙破壞最甚。逃入東灣。忽見一隻船自海上來。即操江高陞也。秋津直迎擊操江。操江又不能支。遂降。乃奪其旗。代以日章旗。濟遠之逃也。吉野追馳數十里。砲彈數及之。濟遠逃入淺水。乃還。先是浪速迎高陞。奏 鳴砲止其行。使士官駕小舸見之。船長英人答曰。清兵一千餘。并器械搭焉。士 官曰能尾我來否。曰唯命。乃發舸促之。船長曰。吾欲從命。奈清將不肯何。既 餘 一船大擾欲戰。吾艦揚號曰。舍汝船。船長曰。請送一舸。曰盍駕汝舸。清兵擬 唱 銃船長。船長與水手皆投。逃。爲我所救。於是吾艦發砲亂。擊沈之。皆死。聞 有。戰以來。敗艦將或死或逃。無舉船納降者。其降此爲始。實甲午七月廿五日 也。忽軒曰結三十一 字以代論贊佳甚

記牙山戰

清大將葉志超。副將聶士成。率二千五百餘人屯牙山。蓋欲藉名平寇。劫制朝鮮也。既聞吾軍益入京城。退韓人叛王者。國王李熙下教。改革政。則大懼。增築堡寨於成歡驛。據險設備。防禦甚嚴。吾使臣大島圭介受王旨。使清兵撤去。不從則擊之。忽軒曰不從則擊。神丹靈藥。師團長大島義。乃進兵龍仁營七原。遣使諭清將。清將 凱 不聽。七月廿八日義。議敵嚴備本道。急攻之。恐多死傷。非計也。不若遠出其背 餘 以乘不意。忽軒曰義昌 源九郎再生乃以寡兵當其前。夜發大軍度水遇伏擊退之。進出陣後敵不 唱 知也。明日昧爽我前軍呼譟而前。敵以爲寡兵易與發砲迎戰。俄聞後軍砲轟。大 驚。相顧而潰。吾軍乘之。前後挾擊。殺五百餘人。我將校者五。兵卒七十人 餘。敵走洪州。大將葉志超等僅以身免。糧食器械委積盈途。皆爲我所獲。忽軒曰 作者亦 龍門 後弟

(一) 龍門 後弟

(二)

百川曰：余嘗閱舊史，豐大閣朝鮮役，吾將與明人戰克者三。小早川隆景之碧蹄館，加藤清正之蔚山，島津義弘之新塞是也。然不過籍此以完吾軍耳。未嘗聞有進取之功，擒獲之利也。忽軒曰：此論僕不服，請他日拔劍斫柱相共談之。如近日，陸大捷則不然，擒一艦。

奏

沈一艦，走二艦，及破兩寨，殺傷五百餘人，獲器械糧食無算，不復見其隻影。

凱

於韓土其功偉矣，豈謂古今人不相及耶？雖然前途甚遠，形勢萬變，切望諸將蓄

餘

持重，不輕小敵，不貪小利，重能為國建大功也。忽軒曰：結末不似論古休，似書續結法，可惜哉。

唱

信夫忽軒曰：合前後二篇，不滿千餘字，而紀言敘事，明如曙火，真為大史筆，使僕誠為之萬言不費，嗟呼。

### 記小西攝州十字槍

斃鄭撥於釜山，此槍也。刺申於彈琴臺，此槍也。懸軍長驅躍入王城，八道震

駭，萬騎膽落，莫非此槍之力焉。

若夫明兵圍平壤，蜂擁蟻集，一望無際，執此

奮一敵兵披靡，完軍而退，雖敗且然，此槍之可知矣。獨恠關原之役，未及

接戰，而陣亂不可禁，此槍不能染一之血，并其身付他人何也。一勝一敗有其

奏

數耶？抑發縱指使不得其人，皆非也。欲耀武於海外，著名於後世，其氣充矣。

凱

志盛矣。此槍則有功焉。及勢圖利貪，士謀財槍之利不變於昔，而主人之氣饑矣。

餘

此槍不過一頑鐵焉耳。攝州就檢於竹中氏，此槍傳其部下瀨藤某，某傳南宮神官

唱

不破氏。三百餘年，吾友小崎公平為岐阜縣知事，一日過不破氏，見而愛之。祠

官曰：吾家寶之久矣。諸侯千金購之不肯，公有心人也。請以為獻。公平大喜厚

謝之。命工砥礪，且改造其桿，置之左右，使余為記其始末。今茲甲午七月，有朝

(三)

鮮之變，志士奮欲效力疆域，余雖老矣，豈無所感乎。乃為之記。

牡丹臺

旋風吹黑羊角島。烈火灼紅牡丹臺。清兵必死扼要害。萬礮齋發聲如雷。前者仆  
 後者進。益衆。氣益奮。一卒蹶起攀城垣。捷如飛鳥降開門。三軍吶喊蜂擁入。  
 烟塞。尺天爲昏。白旗城上翻薄暮。沛然俄逢起雷雨。不知巧爲緩兵計。乘隙蒼  
 皇群馬驚。嗚呼天兵無意誅么麼。盍早。伏投干戈。不然崑岡同焚在眼前。奈爾  
 頃刻生命何。

唱

杉浦梅潭曰。詞短意長。英氣衝天。字字皆血。鮮如有聲。使讀者有立彈丸雨  
 注關之想。

明治廿七年十月九日印刷  
 明治廿七年十月十二日發行

發行者 渡邊兵吉  
 東京市神田區表神保町貳番地

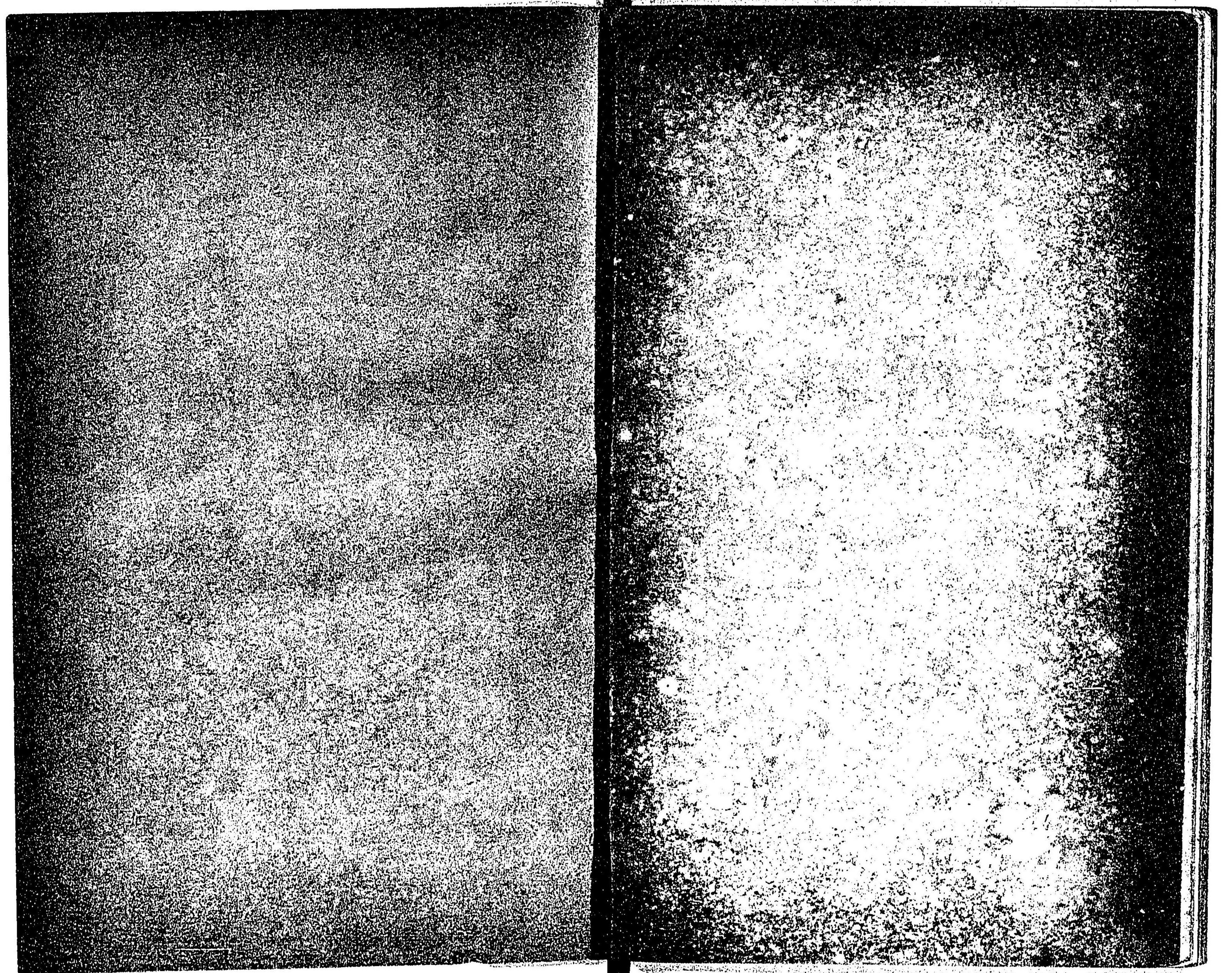
著者 依田百川  
 東京市神田區小川町一番地

印刷者 熊田宜遜  
 東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所 熊田活版所  
 東京市神田區錦町三丁目廿五番地

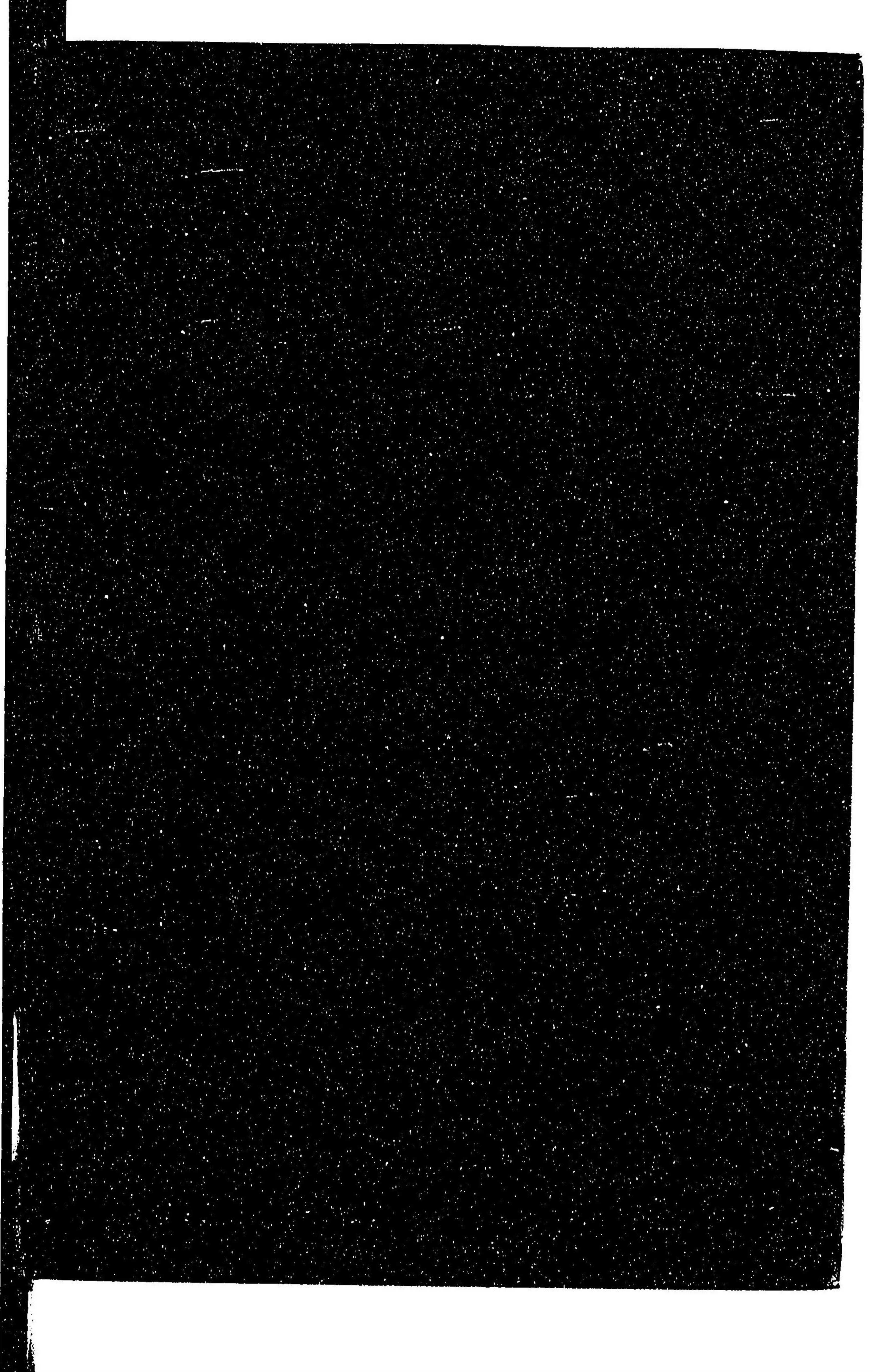
東京市神田區表神保町貳番地

發行所 六合館書店



45  
57





45  
54

002400-000-2

45-54

征清録

依田 学海/著

M27

ACB-5789



